

てんりゅう



暮らしの見本帖



「別冊」暮らしのインタビューと天竜区の水



暮らしが見える。感じる体温。^{ぬくもり}

Tenryu + Plus



ライフスタイル

私たちの暮らしって ブランド化 できんかね？



「そのヒントは
てんりゅう暮らしの見本帖に
あるのかもしれないね」

暮らしが見える。感じる体温。



てんりゅう 暮らしの見本帖

「別冊」暮らしのインタビューと天竜区の水

contents

暮らしのインタビュー

- 4 日々オールを漕ぐ人たち
- 6 天竜川で鮎釣りを楽しむ人
- 8 いかだ遊びをする子どもたち
- 10 段ボールいかだで川遊びする子どもたち
- 12 あまごを育てる人
- 14 ホタルに魅せられた人
- 16 ミュージカルを演じる人
- 18 そばをうつ人
- 20 栃の実でお菓子を作る人
- 22 ヤマメつかみ取り大会を企画する人
- 24 地域の特産品を作り続ける人たち
- 26 二俣川の岸辺をきれいにする人たち
- 28 あまごを養殖する人
- 30 井戸水で野菜を洗う人
- 32 地域の生命と財産を守る人
- 34 霧穴で種芋を保管する人
- 36 樽山の滝を見守る人
- 38 阿多古和紙を漉く人
- 40 棚田を守る人
- 42 わさび田を世話する人
- 44 森林を育て、守り続ける人
- 46 神秘の池・新宮池で夏祭りを楽しむ人
- 48 小規模飲料供給施設を管理する人
- 50 伝統の舞を受け継ぐ人たち
- 52 川端の家で涼む人たち
- 54 二人三脚でこんにやく作りをする夫婦
- 56 山の上で大凧を揚げる人たち
- 58 鍛冶屋を営む人



てんりゅう暮らしの見本帖
別冊「暮らしのインタビューと天竜区の水」

浜松市天竜区役所
〒431-3392
浜松市天竜区二俣町二俣 481 番地
☎ 053-922-0013
E-mail:tn-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

HP 検索「てんりゅう暮らしの見本帖」

天竜区の水

- 60 鹿島八幡神社の湧き水
- 61 西来院いぼ観音の水
- 62 天白井戸
- 63 白倉の長寿の水
- 64 瀬尻不動の滝
- 65 歩危の湧き水
- 66 銀冷水
- 67 龍頭の湧き水
- 68 足神社の湧き水
- 69 山住の湧き水
- 70 神の水
- 71 新宮池

水上でしか味わえない景色がある

天竜区の船明ダム湖にある「伊砂ボートパーク」では、練習を終えた地元・天竜高校のボート部の部員たちがボートを陸に上げているところだった。

ボート部は男女合わせておよそ20人で活動している。夏場は朝8時半から練習。一日で漕ぐ距離は15キロほどにもなるそうだ。学校がある日には、放課後すぐに自転車ボート場へ向かう。30分ほどで到着するが「これもアップの一環です」と、現在、このボート部を束ねている部長が笑顔で話してくれた。

中学時代は、ソフトテニスをやっていたという彼女は、高校からボートの世界に足を踏み入れたそうだ。「ボートは種目によって、魅力が違うところが面白いですね。2人で漕ぐのと、もっと大勢で漕ぐのとでは、技術的なことも、呼吸を合わせる難しさも違いますし、その中で自分の得意、不得意なところが見えてくるんです」一緒に乗る相手と息を合わせることで、一体感を持つことができるスポーツなのである。

彼女はゴール地点で見る景色が一番好きだと話してくれた。「最後まで漕ぎ切ったという感覚がいいんです。今漕いで来たところにブイがずらっと並んでいる感じが。岸からでは絶対に味わえない、ボートの上でしか味わえない景色です」

天竜でボートができるということ それは本当に恵まれたこと

「まっすぐなコースで練習できるということは、とても恵まれたこと」だと彼女は言う。「曲がりくねった川や波のある海で練習している学校もあるんです。それに対して、船明ダムのダム湖は流れもなく、まっすぐなコースが取れ

る」。ダム湖の中でも、ここまで良い条件のそろった場所は限られている。2,000メートルのコースが取れる場所は多くはない。他にはないスケールがこのボート場にはあるのだ。この環境だけを見てもここが「ボートの聖地」と呼ばれる理由が分かる。恵まれた環境を十分に生かし、黙々と練習を続ける高校生たち。過去には、この地からオリンピック選手も輩出した。

天竜から大海へ漕ぎ出す

今のチームの目標は「当たり前前を当たり前にする」ということ。「あいさつ、準備、片付けなど簡単なことのようにでも、とても大事だと思うんです」。そういえば、ここに取材に訪れた際、どの部員も真っ先にあいさつをしてくれた。また、片付けをしているときもキビキビとしていて、自分のやるべきことを分かっているようである。

続けてボート部のカラーについて質問すると「天竜の人は一人ひとりが元気にぎやかなところがいいところだと思います。それから、個性的なところも。今年のボート部は個性的過ぎるかもしれませんが・・・」ボートで感じる一体感の中で、いろいろな個性が見えてくるのかもしれない。そんな体験もボートならではの体験だ。

ボートの聖地で練習する彼女の言葉には、チーム全体を高みに導こうとする本気の響きが入められているように感じる。ぜひ、世界を目指し、ここ天竜の地から大海に向けて漕ぎ出して欲しいものである。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

ゴールした後、湖面に広がる景色は 私たちだけのもの。

てんりゅう暮らしの見本帖

「日々オールを漕ぐ人たち」



初夏の風物詩

6月1日、午前4時。空にはまだ星を見ることが出来る。普段であれば、多くの人が寢静まり、聞こえるのはウグイスのさえずりくらいだが、この日はかりは様子が違う。天竜川の河原には、鮎の解禁日を心待ちにしていた釣り人たちが、続々と車に乗って集まってきた。中には、前日から泊まり込みで場所取りをしていた人たちもいる。釣り人たちの朝は早い。

ある釣り人から待ち合わせに指定された時間も午前4時。釣り人の家は、天竜川の目と鼻の先にある。予定の時間びつたりと赤のウインドブレーカー、麦わら帽子、長靴のいでたちで現れたのは阿隅さん。この道50年以上の大ベテランだ。「残念だけど、今日は釣れそうにない。鮎がいないんだよな」と阿隅さんの第一声。竿を投げる前から、釣れるかどうか、鮎がいるのかが分かるという。阿隅さんはこう続ける。「みんな、鮎が跳ねているかでいたい見極めている。でもね、跳ねてる鮎は実はあんまり釣れないんだ。俺はね、川底の石の色をよく見る。鮎がどれだけコケをなめているかをね。」

そういわれて川に目をやるが、素人が見てもよく分からない。阿隅さんの話では、鮎が多くいる場所は、石が黒光りするほどになるらしい。そして、この辺りの川は、どうもそういう状態ではないのだそうだ。

「俺はね、鵜よりも魚がどこにいるか知っているからさ」。阿隅さんはそう言っただけで笑った。しかし、それもまんざら嘘というわけではない。阿隅さんの日常は、毎朝の愛犬との散歩で始まる。365日、天竜川の堤防沿いを歩く。わずかな川の変化も見逃さない。

達人の技

マジックショーのよう

「みんながいるところで釣るのも何だし、少し穴場に行こうか」という阿隅さんの後を追う。長靴姿だが、岩場を歩くのがとにかく速い。こちらはスニーカーを履いていたが、その速さにとても追いつかない。「足場が悪いから、ゆっくりこいよ」阿隅さんはそう気遣ってくれた。子どもの頃から通い続ける天竜川は、文字通り阿隅さんの庭なのだ。

午前4時30分。少しずつ束の空が白んでくる頃、阿隅さんは慣れた手つきで糸を垂れ始めた。「そうだな、10分後には1匹目が釣ればいいところかな」時計を見やっけてそういった。実際に初物を釣り上げたのは、予告通り10分後。まるでマジックでも見ている気分だ。この手品にタネや仕掛けがあるのか聞いてみたが、特別なことはしていないと笑う。「まあ、誰でも同じように釣れるわけじゃないんだけどね」と阿隅さん。川の中の魚を、自分のところだけに集める術でもあるのだろうか。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

達人の流儀

2時間一本勝負

毎年、解禁日である6月1日から、4時に家を出て、釣りに出かける日々が続く。ただし、長時間、河原に居ることはない。「例えば、6時8分に天竜浜名湖線の電車が鹿島の鉄橋を渡る。それなら、その日の釣りはおしまい」。阿隅さんの鮎釣りは、4時から6時までの2時間一本勝負だ。「釣れない釣りはしない」というが、現に日が昇った後では鮎は全く釣れなくなるという。今では、仕事もリタイヤし、朝から晩まで釣り三昧の生活もできるのだろうが、1日2時間までというのは、現役時代からの一貫したスタイル。ちなみに2時間で、どのくらい釣り上げるのか聞いてみたが、簡単には答えてくれなかった。内緒にするからと願うすると「隣の人の3倍くらいかな」としばらくしてから教えてくれた。

この日も午前6時になると、阿隅さんは愛犬の散歩があるからと、意外なほどあっさり竿を片付け始めた。魚籠の中には40匹ほど。鮎がいないとは言いながら、他の釣り人たちに比べると、その数はやはり3倍近い。

「やっぱり今日はだめだったな」と阿隅さん。どうも納得がいけない様子だ。それでも「また、明日だな」と語る目は少年のよう。こうして、太公望のいつもの6月がいつものように始まる。阿隅さんは、先ほどと同じさっそうとした身のこなしで、その場を後にしていった。

—午前6時15分。

鵜よりもね、 魚がどこにいるか知っているんだ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「天竜川で鮎釣りを楽しむ人」



天竜区の暑い夏

天竜区の夏は暑い。昨日に引き続き、区内は今日も猛暑日だ。今朝のニュースでは、早ければ週明けには梅雨明けするのではとの報道もされていた。夏休みも間近に迫った7月半ば、天竜区春野町の熊切小学校で、毎年恒例のいかだ遊びが行われると聞いて、その様子を見に行ってきた。天竜区の子どもたちにとって夏といえば、何といても川遊びなのだ。

清流・熊切川に到着すると子どもたちの歓声が春野の山々に響き渡っていた。カラフルなライフジャケットとゴーグルを身につけた子どもたちの姿が勇ましく見える。近くでは大人たちがそれをまぶしそうに見つめていた。「田舎の夏って感じだな」と見ているこちらも何だかわくわくした気持ちになってきた。

熊切小学校のいかだ遊びは、子どもたちが自分たちで作ることから始めるのだそう。林業体験で山から切り出した間伐材を利用して、子どもたちがゴムチューブなどを使っていかだに組み上げていく。林業体験というのが、いかにも森林に囲まれた天竜区らしい。

6年生の西村さん、森下さん、岩本さんは仲の良い3人組。今年のいかだの出来を尋ねると「今年はちょっと小さめになっちゃったんだ」と残念な素振りも見せたが、みんなで力を合わせて作り上げたことには胸を張った。自分たちで材料となる木材を切るところからやっている

のだ。それだけでも十分に価値がある。完成した3隻のいかだは、それぞれに子どもたちのアイデアと思いが詰まった力作ばかりだ。

いざ、出航！

上流までいかだをみんなで引いて行き、一斉にその上に乗り込んだ子どもたち。3隻それぞれに、オリジナルの旗が掲げられ、準備は整った。

いざ、出航の時。川の流れに乗って、ゆっくりといかだが動き出す。子どもたちからは大きな歓声。川岸で見守っていた保護者や先生たちからも大きな拍手が送られた。子どもたちは、冒険家顔負けの凛々しい表情で真つすぐに下流を見据えて進む。

——夏が子どもたちを大人にする。

どこかの映画か何かで聞いたようなセリフだが、まさにそんなワンシーンが目の前で展開された。よく日焼けした彼らの顔から白い歯のぞく。子どもたちにとっても忘れられない日になるんだろうな。そのとびきりの笑顔を見るとそう思わずにはいられない。

ここでしかできない経験

子どもたちは飽きるまで、いかだ遊びを堪能し、川岸が上がってきた。この行

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

事のもう一つの楽しみはスイカだ。今年も特大のスイカが用意され、子どもたちはとてもおいしそうにそれを頬張った。

「いかだとスイカ、どっちがよかった？」と尋ねると「スイカ！」と「いたずらっ子」と顔を上げて、男の子が答えてくれた。と言いつつも「いかだ遊びは、ここでしかできない遊びだからね」とも。大自然の中での体験は、自慢すべきことだと子どもたちも知っている。「熊切小だからできることなんだよ」とうれしそうに話してくれた女の子もいた。

全校児童18人の小規模校である熊切小学校。校長先生は「少数だからできることがある」と話してくれた。その思いは、子どもたちや保護者たちも共有している。

また、このいかだ遊びを始め、地域の特徴を生かしたさまざまな校外活動が行われているが、いずれも地域の人たちの協力が欠かせない。8月には、地域の釣り名人の手ほどきで魚釣りをするほか、10月には、やはり地域の人の協力を得て、アユの甘露煮に挑戦するそう。

「今年はいつよりも川に来ることが多くなりそう」と6年生の3人はうれしそうに言った。こうした体験が年間を通してできるのは、清流を持つ地域の特権だ。存分にその魅力を体感する1年にしてほしいと思った。

スイカを食べ終えた子どもたちは、もう一度川に戻って行った。水中眼鏡で魚を探す子もいれば、岩場から飛び込む子もいる。水鉄砲で水を掛け合う姿も見られた。夢中になって遊ぶ子どもたちを見ているだけで何故だろうかうれしい気持ちになる。夏本番はもう目前だ。

ここでしかできない 自慢の遊びだよ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「いかだ遊びをする子どもたち」



ようこそ！自然いっぱいの水窪へ

色濃い緑に囲まれ、すぐ横には翁川の清流が流れる。余暇を過ごすには絶好のロケーションが水窪町内にはある。大きく開けた青空と照りつける日差しの中、にぎやかな声が聞こえてきた。

地元住民で構成されたNPO法人まちづくりネットワークWILLが、親子キャンプ教室を開いていた。朝は早起きして虫とりに行って、夜は空いっぱいの星を見る。竹を採ってきて、それを器にしてご飯を食べる。そこにある限られた素材を生かし、ちょっと工夫をして、いかに楽しめるかを体験できるイベントだ。これらは、街中ではできないこと。

「日ごろ体験できないことを思いっきり楽しめるし、自然に囲まれてのびのび過ごすことができる。子どもたちにとって、夏休みの良い思い出になります」家族で参加していた男性がそう話してくれた。

今日は、段ボールでいかだを作り、川遊びをするという。「すぐ近くに川があるから、その地形を利用した企画をできるのがいいですね。他にも何か考えられないかしら」と、数年前から始めたこのイベントについて、代表の平澤さんはそう話してくれた。翁川は浅瀬もあり、その水はとても澄んでいる。水遊びをするにはもってこいの場所だ。

地元っ子には日常の一コマ いつもの遊び場

都会の子にとっては、このキャンプ場での出来事は非日常だが、地元っ子にとってはどうだろうか？

「暑い日なんかは、学校帰りに川に入っちゃうこともあります」ボランティアとして参加していた佐久間高校の女子生徒が教えてくれた。男の子たちは5月ぐらいからそんなことをしているんだと半ばあきれた感じで話すが、川遊びに慣れていることが伝わってきた。

さて、段ボールが浮くようになるのだろうか心配していた人もいたが、ビニールテープで頑丈に補強された『いかだ』は川に浮き、進んでいく。小さい子のなかには浅い場所でも顔がこぼってしまって泣き出しそうな子もいたが、どのいかだも沈むことはなかった。中学生・高校生ボランティアは、ここでも活躍。川の水は冷たくて、流れが速いところも一部あるが、躊躇なく足を踏み入れ、腰まで水に浸かって参加者をサポートしていた。

「今度また、小学生対象の教室があるから。今回はその練習で来ているみたいなの。下の子にいいところ見せたいからね」平澤さんは、そうは言うものの、これから地域を担う子どもたちを頼もしそうに見つめていた。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

暑い日は、 学校帰りに川に入っちゃいます。

てんりゅう暮らしの見本帖

「段ボールいかだで川遊びする子どもたち」



情熱が支えた挑戦

「養殖を始めた頃は、みんなに絶対うまいくないからやめた方がいい、ってよく言われたみたいだよ」と話してくれたのは、春野町田河内（たこうち）であまごの養殖場を営む奥野さん。奥野さんのお父さんが、この地で養殖を始めたのは今から40年ほど前。あまごは、温度変化などに弱いデリケートな魚だけに、地域内の人たちだけでなく、専門家からの意見もずいぶん厳しかったそう。

この挑戦を支えたのは、何とか山里の特産品を生み出したいという熱い思いだった。その後、周囲の不安をよそに、見事、養殖の成功にこぎつけた。清らかな水がなければ育たないというあまご。奥野養殖場は、田河内集落を流れる川のすぐそばにあり、沢の冷たくて澄んだ水を引き込んだ。結果的には、田河内の豊かな自然環境もまた、あまごの養殖成功のカギとなった。

努力の結晶

現在、年間4万匹のあまごを養殖している奥野さん。去年の5月に稚魚を水槽に入れてから、1年半をかけて、何度も大きさなどの選別を繰り返して大切に育ててきた。特に注意を払うというのが水温管理。「特に夏場は、温度が上がるとすぐに魚が死んでしまう」と苦労話をしてくれた。また、水量が少なくなると魚は、すぐに酸欠になってしまうのだそう。「常に水の管理には気を抜けない。あまごはデリケートな生き物だから」と奥野さんは我が子と思うようにいった。

奥野さんが管理する養殖場は、水槽の水とは思

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

手間ひまかけて作られる絶品

えないほどきれいで、透明度が高い。水温が重要と聞いていたので、手を入れてみると、かなりひんやりとした。沢から汲み上げられた水は水槽内を流れ、常時入れ替え続けられる。水の質も重要だが、豊富な水量を確保しなければならない。水槽の中に入り、あまごを見せてくれるという奥野さん。腰ほどの深さの水槽を網でひとすくいとすると、あまごの大群がバシャバシャと威勢良く姿を現した。この元気のよい魚たちは、奥野さんの日々の努力の結晶だ。こちらもその姿をしつかりと収めようと、カメラのシャッターを切った。

年末年始にかけて、出荷は最盛期を迎える。あまごの甘露煮は、奥野養殖場の看板商品だ。朝7時頃、寒さに身を震わせながら、あまごを水揚げし、奥野さん自ら慣れた手つきでさばっていく。囲炉裏に火を起し、焼き始めるのが昼頃。手のかかる作業はまだ続く。

焼き上がったあまごは、およそ10時間かけてようやく甘露煮になる。時間をかけて丁寧に煮込まれた甘露煮は、旨味が凝縮された絶品。年末の贈答用として使われ、喜ばれることも多い。

囲炉裏に使う薪割りや竹串づくりも時間のかかる作業。「下準備がなかなか大変だね。やることばかりだ」と奥野さんは苦笑いした。

自然の恵みと、手間を惜しまない奥野さんの手仕事によって生み出される山里の味覚。40年前、奥野さんのお父さんが抱いた情熱は、確かに今につながる。奥野さん自慢のあまごの甘露煮には、こうした隠し味もしっかりと利いている。

水の管理はかかせない。 デリケートな生き物だから。

てんりゅう暮らしの見本帖

「あまごを育てる人」



美しい水の象徴

美しい水といって思い浮かべるものはいくつかある。川の透明度を挙げる人もいるだろうし、アユやメダカが存在をその象徴と考える人もいるだろう。そして、その代表格の一つがホタル。清流を有する天竜区には、ホタルの名所がいくつもある。天竜区熊地区のホタル、春野町のホタル公園、そして、龍山町のふるさと村。

龍山町瀬尻せじりにあるふるさと村は、ひっそりとした雰囲気なたたずむペンション。ふるさと村を訪ねる前にいるいるな人に話を聞くと「ふるさと村のホタルはすごくいいよ。それから、管理人の小川さん。すごく面白い人だからね」と口を揃えていった。「レコードもいっぱいあるから、好きな曲をかけてもらったらいいよ」とのアドバイス付きで。

アナログの世界

7月初旬、小川さんに会うためふるさと村を訪れた。この時期は、ホタルの最盛期である。出迎えてくれた小川さんは、ジーンズにコットンのシャツスタイル。口マンスグレイの髪には、バンダナが巻かれ、いかにもペンションの管理人といった風貌だった。彼は優しい笑顔で、僕をペンション内の応接間に案内してくれた。

応接間には古いレコードの山。ざっと見ても数千枚という数だ。「好きなレコードをかけるからね」とこの言葉に甘えて、イーグルスのホテル・カリフォルニアをリクエスト。ホテルとホタルをかけたつまらない冗談のつもりで頼んでみたのだが、理由はそれだけではない。曲が持つイメージとふるさと村の雰囲気はどこことなくオーバーラップする。それは空間的な意味だけではない。小川さん自身の不思議な魅力のせいだったと後々になって感じた。

ホタルが飛び始めるという時間になるまで、しばらく話は続いた。人口減少が続く龍山のことや田舎暮らしのこと、ふるさと村の管理人になるまでのいきさつなど内容はさまざま。小川さんは、話題が変わる度にさまざまな資料や写真をすぐさま用意してくれた。特に小川さんが大事にしていたのは、これまでペンションを利用してくれた人たちの写真。アルバムは相当な数だった。「写真を撮る時にみんなを笑顔にするのが得意なんだよ」と小川さん。確かにどの写真も笑顔であふれている。あえて「人とのつながりが大切だ」と言葉にはしなかったが、彼の人となり、そのアルバムを手に入れば十分伝わる。話しの途中、小川さんは「田舎はアナログの世界だからね」といつていたが、レコードしかり、ホタルしかり、人との関わり方しかり。ふるさと村にあるアナログな手触りが、人々を自然に笑顔にさせるのだと思った。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

ホタルの光の魔法、 誰もが子どものような顔になる

「そろそろ出かけようか」と小川さんが声をかけてくれたのは、午後9時を過ぎてから。気がついたら2時間も話し込んでいた。聞き忘れてはと思い「ホタルって小川さんにとってどんな存在ですか」と唐突に尋ねると「質問が下手だな」と笑われ「金儲けの元だよ」と続けた。半分は本心で、半分は照れ隠しなんだろうと思った。そういう一筋縄ではいかないところが、この人の魅力だ。

小川さんの四駆に乗って、ホタルが見られるという川辺まで向う。その道中、モリアオガエルの卵を発見し、カモシカに出会った。小川さんは到着すると、三脚を立てて写真撮影の準備。この日は、ふるさと村に宿泊するお客さんたちに同行させてもらったのだが、ホタルを見るなり大人たちは子どもに返ったように夢中になった。これが人を惹き付けるホタルの光の力だと改めて思った。ホタルの描く光の世界は、どこか儂ほろく神秘的で、そして美しい。

準備を終えた小川さんは、僕たちにホタルの生態について説明を始めた。その説明は、今までどこで聞いた内容よりも丁寧だった。そして、話はこう締めくくられる。「ホタルは、1週間か10日ほどしか生きられない。その間にね、命がけの恋をするんです。ぜひ、皆さんも命がけで恋をしましょう」と。「それじゃあ、撮るよ」と小川さんに素敵な魔法をか

ホタルはね、 命がけで恋をするんですよ。

てんりゅう暮らしの見本帖

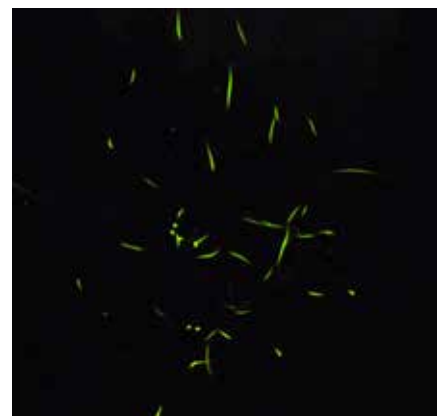
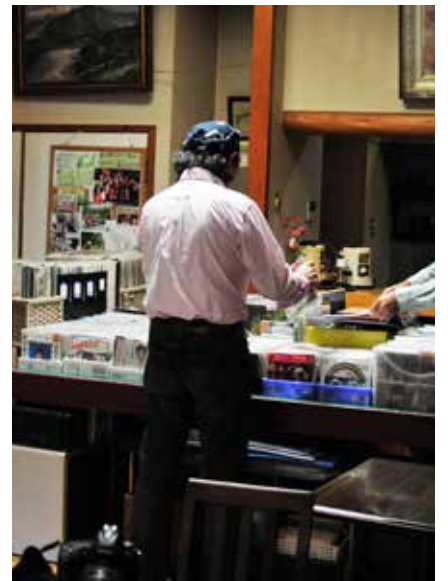
「ホタルに魅せられた人」

けられたまま、僕たちは記念写真に収まった。

数日後、小川さんからその日の写真が送られてきた。無数のホテルが乱舞するなか、僕たちは満面の笑み。写真には「ホテルの宴 龍山ふるさと村」の文字。もちろん、小川さんの姿はないが、ファイндаの向こう側で優しい笑顔をしている体温を感じることができる。ああ、こういう年齢の重ね方をしたい。素直にそう思った。

写真のお礼を伝えながら、もう一度、ふるさと村を訪ねることにしよう。自然とそう思える。ふるさと村は、リピーターが多いと小川さんから聞いていたが、その理由ももうなすける。僕は、ホテル以上に小川さんの人柄に魅せられてしまったようだ。

さて、次は何のレコードをかけてもらうことにしようか。ふるさと村に訪れるからには、それもまた楽しみの一つだ。



地域に根ざした芸術文化を

天竜区二俣町にある天竜壬生^{みづ}生ホールのステージでは、翌日に控えた本番を前に、ミュージカルの最終リハーサルが行われていた。ミュージカルのタイトルは「カッパの総理大臣」。水の大切さを伝えるためのオリジナルの台本には、天竜川や数々の清流を有する天竜区にふさわしい物語が描かれている。

このミュージカルに出演する子どもたちおよそ30人は「龍水の都文化体験プログラム」に参加し、これまでも地元の人、本田宗一郎や秋野不矩を題材としたミュージカル作品を手掛けてきた。これらの活動は、内閣府のチャイルドユースサポート賞や静岡県文化財団の地域文化活動賞を受賞するなど、地域に根付いた芸術・文化活動として区内外においても高く評価されている。舞台上の子どもの演技や歌の表現力は大人顔負け。公演の度に、見る人たちに大きな感動をもたらしている。

世代を超えてつくる舞台

この日のリハーサルに参加していた高校2年の田中さんは、天竜壬生ホールでのワークショップをきっかけに、小学2年生からミュージカルを始めた。舞台経験なら、10年近いベテランだ。「母が申し込みをしたのが始まりですね。もともとは、それほど人前が出るのが得意な方ではなかったんですが」と田中さんは

苦笑いしていた。「でも、やっているうちにだんだん楽しくなってきた。今も目立つのは苦手だけど、舞台上ならそれほど気にならない。ミュージカルを始めたいことで、ちょっとは私自身も変わったのかもしれないですね」と語る。彼女は、高校入学後、演劇部に入部したそうだ。「カッパの総理大臣」は、田舎町に現れたカッパと子どもたちが、大人たちを巻き込んできれいな川を守ろうと奮闘する物語だ。出演者の大多数は小学生のため、高校生の田中さんは大人役。また、普段の稽古場での彼女は、小学生たちを見守る良きお姉さんの存在でもある。

「このミュージカルには、小学校低学年から私の母親ほどの年齢の人まで出演しています。世代を超えて一つの作品を作り上げていくのは、貴重な経験かな、って思います。ミュージカル仲間は大切ですね」と田中さんは笑顔でいった。高校の演劇部のように同世代だけで作る作品とは、また違った面白さがあるそうだ。「今回の作品のテーマは、水の大切さ。その内容だけ考えれば少し難しいですよ。でも、小さな子どもも参加して楽しく分かりやすく伝えたいのがいいんだと思います」と今回のミュージカルについて話してくれた。

天竜区から届けるメッセージ

天竜川のすぐそばに住んでいるという田中さんだが、普段は自然の大切さにつ

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

いて考えることはそれほど多くはないという。それでも「大人が川でボイ捨てするのを見れば、ヤメロ！って思います」と高校生らしい言葉が返ってくる。「カッパの総理大臣」も、川がきれいな天竜に住む人たちがやるからこそ意義や説得力があると感じていた。「でも、毎日ここに住んでいるから、そんな風に感じるのには、ホントにふとした瞬間だけですけどね」と照れくさそうに笑う。この辺りの正直さもまた、高校生らしい。

翌日、彼女たちは本番のステージの上이었다。満員となった観客たちは、子どもたちのまぶしい表情と物語の世界に引き込まれて、演者たちに負けず劣らずの真剣な顔で舞台に向かっていた。

ミュージカルのさまざまなシーンで聞かれる「川をきれいにしよう」「水を大切にしよう」という台詞が胸に残る。台本に書かれたものだと分かっていながらも、子どもたちの素直なメッセージのように感じられ、不思議と説得力があった。田中さんの「天竜区発のメッセージだから伝わる」という言葉を思い出す。彼女もまた、生き生きとした表情で舞台で歌い、踊った。

そして、エンディングの大合唱で、会場全体の感動はピークを迎える。客席からは割れんばかりの拍手。子どもたちのこの日一番の笑顔に、こちらも心が震えるのをはつきりと感じた。彼女たちの大きなメッセージが、多くの人たちの心に届いた瞬間だ。

「私たちの川をみんなで守ろうよ」と。

川がきれいなまちの人たちが 演じるミュージカルだから、意義がある。

てんりゅう暮らしの見本帖

「ミュージカルを演じる人」



水が大事なんだよね

「そば打ちに大事なものは水。当たり前のように、美味しい水が手に入る天竜区は、わたしにとってもそばにとっても、うれしいよね。」

そう語るのは、佐久間町在住の中野さん。素早い手つきで、そばの粉をどんどんこねていきます。

「水加減、これが決め手」

さっきまでサラサラだったそば粉が、みるみるうちに塊になっていくさまは、まるで魔法にかけられたよう。

「指に何か仕掛けがあるのでしょうか」

そんな愚問にも「そんなことはないよ。指のハラでやさしくこねているとね」「もう少し水がほしいよ」とか、「もう大丈夫だよ」とか、そば粉が答えてくれているような気がするんだよね。そう、あたたかい笑顔で返してくれる中野さん。

「さて、練りに移ろうか」

きっかけは「花は咲かせられなかったけど…」

中野さんのそば打ちのきっかけは、今から30年前に知人と長野県を訪れたときのこと。一面、真っ白なそばの花が咲き誇っていたのです。感動した中野さん。すると、海岸近くに住む知人も、「自分の家の近くでも、この花を咲かせたい」と思わず口にしたのです。さっそく知人家へ種を300グラム持って行ってね。でも、さすがに砂浜じゃあ育たなかった

…と、当時は振り返ります。

知人家は、子どもたちなどが通うスクール。中野さんは「そばの花は咲かせられなくても、食べさせることはできる」と、実際にそばを打って持って行ったのです。中野さんは続けます。「子どもたちがそれは喜んでくれてね。忘れられないな、あの笑顔」。

その笑顔って、きつと、今の中野さんの笑顔みたいなんでしょうね。

365分の365

「そばのこと？改めて聞かれると困るなあ。でも、やっぱり毎日、考えているんだらうね。どうしてもおいしいそばを食べてもらえるか。「おいしかった」「また、食べたい」と言われたら、また頑張っちゃうよね。そのために、そばを打っているのかな。」

この前、そばの種を蒔いてね。今は一面がそばの花で白く染まって、それはすがすがしい風景ですよ。もう少ししたら刈り取って…今から収穫が楽しみです。

めん棒を3本使って延ばす

話をそば打ちに戻しましょう。

「こねたそばを延ばしますよ」

めん棒を、まるで自分の手のように自在に操る中野さん。丸くこねてあったそば粉が、いつの間にか、うすく、形は四角に延ばされていきます。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

「少しでも乾燥しないようにしたいね。そばの味が落ちちゃうから」と、さらにめん棒を追加して、延ばしたそばの半分をめん棒にくくりつけ丸めておきます。そうすれば表面が乾きにくいと中野さん。忙しい作業の中でも、食べてくれる人たちへの配慮は欠かすことがありません。

「切りますよ」

あつという間に、今まで目の前に延ばされていたそばがきれいに畳まれて、切り板(まな板)の上に。引き続き素早い作業が進みます。細く均一に、そしてリズムミカルに。そう、運動会で徒競争のときに流れるあのBGMが、今にも聞こえてきそうです。

「はい！10人前ね」。45分間のそば打ちの時間は、あつという間に流れていきました。

その先にある笑顔のために

「趣味が高じてね、今ではこれが、わたしの生活のスタイルかな」と、中野さん。「ほとんど毎朝4時過ぎに起きて、5時からそば打ちを始めます。年末には夜8時まで、1日15回繰り返しそばを打つときもありますよ」

中野さんのそばファンは、およそ15年の月日を経て、裾野はどんどん広がっているようです。

「そば屋さんや、イベントなどでそばを打っている人を見るとね、ついつい「技を盗まなっちゃ！」と思って見入ってしまいますね。まだまだ、探求心旺盛の中野さん。今、を決して満足していません。」

その先にある「おいしい」「また、食べたい」の笑顔のために。

そば粉の方から話しかけて くれている気がするんだよね。

てんりゅう暮らしの見本帖

「そばをうつ人」



地域独自の文化を生かして

都市部では、まだまだ残暑も厳しい9月。水窪町内の門桁^{かどげた}や西浦^{にしうら}、河内浦^{こうちうら}の山々では、栃の実を収穫する季節が始まる。「お祭りの準備なんかで忙しくなるけど、ほんとはこっちの作業をやりたいぐらいなんだけどね」お祭り好きな地域柄と聞いていたので、その言葉は本音なのだろうかと思いがねたが、小松さんは栃の実を触りながら淡々と話した。

最近では、栃の木が高級建材として取り引きされるケースが多く、栃の実の確保が年々難しくなっているということだが、小松さんが経営する製菓店では、すべて水窪産。こだわりを持っている。「個性を出さないと淘汰される。水窪独自のもので勝負しないと」その言葉は力強かった。隣接する長野県にも栃の木は多くあるが、実を採って加工して、食べるのは水窪だけなんだと。長野県にはない文化だそうだ。

時間と手間をかけて 勘だけが頼りの仕事

今年採れたばかりだという栃の実をみせてもらったが、それは栗によく似ていた。しかし、味は栗とは違い、アクも強く、食べられるようになるまでには、時間と手間がかかるそうだ。そのため、採算が合わず、大きな会社が手を出したがない。

水に漬け、天日干しをして、また水に漬ける。そして、硬い鬼皮をむいて、2~3週間ほど清流にさらし、さらにそのあと灰の上澄み液に1週間ほど漬ける。こうしてアクが抜けたら実をきれいに洗って、やっと、加工できるようになるのだ。何段階もの手順を踏まなければならない。

この作業は気温や水温、また栃の実の状態な

どで微妙な加減が必要となるため、人間の勘だけが頼りの難しい仕事でもある。地方、地方でやり方が違うけど、と小松さんは前置きをして、「やっぱり山水がいい。冷たい水がいいから山水しか使わない」と水に対するこだわりを語った。また、水以外のこだわりも教えてくれた。薪ストーブを使っている人に檜や榎の木を提供して灰を作ってもらい、その灰汁を利用するそうだ。杉やヒノキに比べ、短時間でアクが抜けるという利点があるという。

ずっとやってきたから、 これ続ける

背後に冬を控えた11月になると、山水が湧き出ている場所で、栃の実をさらしている光景を見かけるようになる。自家用に、自分で栃の実を拾って、栃餅を作っている人もいるそうだ。小松さんのところでは、水の冷たい12月から翌年2月までの間に、家族総出で1年分、250キロを下ごしらえするという。しかし、もっと加工量を増やし、雇用促進につなげたい気持ちがあるそうだ。

栃の実拾いや鬼皮むきは、高齢者の生きがいづくりにもつながる仕事となりえる。また、今後展開したいと考えているインターネット通信販売サイトの開設なども、雇用を見込める。都会から人が戻ってこられる環境になるために、少しでも貢献したいという思いが伝わる。

栃の実を使った和洋菓子は15種類を超えるという。「ずっとやってきたから、これ続けてやっていく」と断言する小松さん。地域の食文化が継承されるとともに、その思いも近く実を結ぶだろう。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

生き残りをかけて、 水窪独自のものでも勝負したい。

てんりゅう暮らしの見本帖

「栃の実でお菓子を作る人」



チャイムとともにヤマメに向かう 人、人、人

正午を告げるチャイムが鳴ると、600人もの人が一斉に川に入ってしまった。見上げると青い空と工事中の三遠南信道路。今年で20回目を迎えるヤマメつかみ取り大会が始まる。

川の至るところに作られた堰は、ヤマメの格好の隠れ場となる。「今年は川の水量が少ないなあ」このイベントを主催するここほれワンワン塾（以降、ワンワン塾）の代表である板橋さんはつぶやいた。昔に比べても川の水量は減っているように感じるという。

今まで4か所ほど会場を移してきたが、しばらくはこの会場での開催が続いている。ふと目を移すと、川を埋め尽くすほどの、人、人、人。大人から子どもまで、皆、ヤマメを捕まえようと必死になっていた。放流したヤマメは3,300匹程度。堰の隙間から泳いでくるヤマメを、座り込んで待ち構える人や水中を見据えて魚の影を追い、タイミングを計って手を出す人。捕まえ方のスタイルは人それぞれだが、ほどなくして「捕まえたー！」という歓声があちらこちらからあがり始めた。

町外から人を呼べるイベントとして

大人も童心に返り、ひたすらヤマメを追うが、時間が経ってコツをつかんだ子どもにはかなわないようだ。水を浴び、全身びしょりになった男の子が、捕まえたヤマメを得意そうに見せてくれた。用意したビニール袋には、これでもかというくらいヤマメが入っている。楽しい？と聞くと、「うん」と即座にうなずいた。

スポーツ少年団などで日頃付き合いがある団体や、毎年恒例にして参加する人など、町外からの参加者が8割ほどにもなる。「町外から人

を呼べるイベントができることは、とても重要だよ」と板橋さんは率直に語ってくれた。人口の減少傾向が続く水窪にとって、交流人口が増えることは願うべきことである。この日は、水窪から転出した家族も多く見受けられたと聞いた。

自然が相手 だから難しい

ワンワン塾のメンバーは、土建業者や電気会社、大工等で構成されていて、個々の得意分野を生かし、さまざまな活動を行っているようだ。このイベントでも、会場の整備や出店の設営などを自前でやり、今回は、中学生のボランティアスタッフを加えた総勢30人ほどが運営にあたっている。

自然が相手であるため、大雨が降った後だったり、逆に雨が少なかつたりした時には、開催の有無や準備等の判断が難しいそうだ。前日にヤマメを放流しておいたら、夜中に捕られてしまったこともあるという。「それから見張りを付けるようにした」と苦笑いしながら板橋さんは話してくれた。20年続いたこともあり、運営ノウハウも培われた。トイレ設置などの会場整備や参加料の徴収方法など、経験を踏まえて改善し円滑な運営を目指している。

炭火の香ばしい薫りがどこからともなく漂ってきた。さっそく、捕まえたヤマメを焼いている。ワンワン塾や女性の会などの出店もあり、自然に囲まれたこの空間で、夏休みの1日を過ごすのもいいかもしれない。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

一人ひとりの得意分野で、 地域おこしに取り組んでいるんです。

てんりゅう暮らしの見本帖

「ヤマメつかみ取り大会を企画する人」



春野といえは

お茶と、和菓子のおおねり。

春野町を代表する特産品である。そして、両者に共通するのは、作り手の「水」へのこだわり。今回は、春野町の茶農家・栗崎さんと、和菓子店・本多屋の西岡さんのもとを訪ね、同時に話を伺った。ちなみに2人は、偶然にも家業を継ぐ4代目。代々、春野町の特産品を作り続けてきた老舗の環境に育った。

茶農家の栗崎さんは、茶の製造・加工・販売までを手掛け、各種品評会でも高い評価を得ている。春野きつての茶のスペシャリストだ。「お茶は作るところから飲む過程まで、水とは切っても切れない関係にある」と栗崎さんは語るが、何ととっても、春野茶の深みを生み出しているのは「川霧」の存在だという。

川霧は、気温や川の水温などが関係して発生する霧で、早朝にしか見られない。霧が深くなるときは雲海のような景色が見られるそう。そして、この霧の水分が茶に適度な水分を与えると同時に、朝日を和らげ、茶葉を保護する。これが春野茶の旨味を生み出す要因の一つになっている。

特産品のコラボレーション

春野は、川霧に加え、寒暖の差や降雨量など、良質な茶を作り出すのに適した環境にある。豊富な雨は、ゆっくりと地表を這い、染み込むごとに土をほぐし、土壌を整える。栗崎さんは「畑を耕すのは人だけじゃない。雨だって、土を耕してくれるんですよ」と話してくれた。茶にストレスを与えず、極力、肥料を減らす努力が続いているという栗崎さん。自然の力をできる限り活用した農業を目指しているのだと力説した。

話の途中、栗崎さんの奥さんが、お茶を淹れてくれた。西岡さんが用意してくれたあおねりと、緑茶入り羊かんがそのお供だ。実は、この緑茶羊かんは、栗崎

さんと本多屋さんが共同で作ったもの。お茶の深い緑色が特徴的だ。その味は、甘さ控えめで渋味も絶妙。当然のごとく栗崎さん自慢のお茶にもよく合う。

「手作りだから、1日20本が限界ですね」と西岡さん。売り切れ御免の看板商品だが、大量生産はできないという。菓子作りに携わる西岡さんも、もちろん水には相当なこだわりがある。「うちが、菓子作りに使うのは沢水。この水でないと、この味はでない」と語ってくれた。

話題は、春野に伝わる伝統銘菓「あおねり」のことに。あおねりの特徴は、何ととってもその色。薄黄緑色の生地は、春野の山々の青さに由来する。大正時代に生まれ、100年近く続くこの菓子は、その色合いと味を今に受け継ぎ、この地を代表する銘菓となった。そして、西岡さんが作るあおねりは、羊かん同様、水の質や量には細心の注意が払われ、丁寧に作られている。

コミュニケーションツールとして

栗崎さんの奥さんが淹れてくれたお茶は、普段私たちが飲んでいるものよりも、ずっと味に深みがあった。それでいて後味もすっきりとしている。奥さんの話では、お湯の温度や時間なども、お茶の味を大きく左右するそう。栗崎さん夫妻は、お茶の淹れ方教室なども積極的にを行い、緑茶の普及に努めている。

「お茶はコミュニケーションツール」というのが、栗崎さん夫妻の持論。この日も、お茶を囲みながら、いつの間にか西岡さんを含めた3人で、春野のこれからのこと、お互いの仕事のこだわりから、世間話に至るまで、さまざまなことについて話が弾んだ。

自然の恵みが凝縮された春野茶とあおねり。それぞれの味はもちろんだが、できれば多くの人と話をしながら、その時間も楽しんでもほしいというのが作り手の願いだ。ぜひ、味わう機会があれば、こうした思いも感じながら、堪能することをおすすめしたい。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

雨だってね、 土を耕してくれるんですよ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「地域の特産品を作り続ける人たち」



誰かの笑顔が力になる

二俣の町中を流れ、昔から地域の人々に親しまれてきた二俣川。

8月も終わりが近づいた日曜日の早朝、河原には草刈機の音が響いていた。この日は河原の美化活動が行われる日。すでに黙々と草を刈る人の姿がある。しばらくすると、河原には多くの人が集まってきて、おのの道具を手にとって作業を開始した。

この活動をしていたのは、「二俣川の岸辺をきれいにする会」の皆さん。二俣川をみんなで遊べて、ゆったりとくつろげるような川にしたい。こうした思いを持った人たちが集まって、美化活動が始まった。活動を始めて今年で13年目。4〜10月の年6回活動をしている。夏場の活動が多く、暑さとの戦いだが、毎回30人以上の人たちが集まってくる。「やらなきゃだめだ!」っていう思いでやるんじゃないかって、こっちもね、楽しみながらやってるよ。遊びに来る人の笑顔が見たくってね。それから草を刈り終わった後『やったぞ!』っていう達成感が、何よりも気持ちいいからね。ここを浜松の自慢のスポットにしたいと思ってるよ!今では岸辺にお弁当を食べにくる人も増えてきた。夏休みには親子でいっぱいになる。

「いい風景だなと思ったよ。うれしくってね。会的小伙伴们に手紙で知らせたんだ」。活動がある月ごとに会員に手紙を

出すという世話人代表の渥美さん。その手紙にはいつも、川で見かけたうれしい風景など、この活動の励みとなるような一言を添えているという。活動は無理なく、「都合が付くときだけ参加する」というスタンスを取っている。何よりも体を大切にしてほしいし、活動に参加できなくても、二俣川を愛するという思いを持っていてくれるだけでいいと渥美さんは言う。「川に遊びに来る人にもね、一日一日だけ私たちと同じ会員になってください」と呼びかけているんですよ。会員と同じ気持ちになってこの川を愛してもらおうってね。そうするとね、川をきれいにして帰ってくれるんです。そしてまた遊びに来てもらえたらうれしいですね」

愛すべき二俣川

「作業をしている人は、それぞれの思いをもってやっていてね」と渥美さんは言う。会員は集まり次第、自分の持ち場へ散っていく。申し合わせをせずとも自分の役割が、染み付いているということらしい。草の刈り方にこだわりを持った人や、担当する場所に思い入れがある人もいる。しかし、二俣川を愛する思いだけはすべての会員が共有しているという。「すぐ近くのお寺のご住職が、9時頃になると一輪車で冷たいお茶やお菓子をいっぱい持ってきてくれてね。そうやっていろいろんな人の気持ちが集まって、人

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

と人がふれあう二俣川の岸辺が実現してきているのかなと思うね」

また、10月の活動後には、地元の中学生全員が集まって、青少年健全育成会の人たちと一緒に刈った後の草を集め、トラックで運び出すのだという。「草を刈ってもらおうとすると中学生にはなかなか大変だからね。草を運ぶお手伝いをやってもらってるよ。そこには、活動に参加してもらおうと、地域全体で二俣川を後世に伝えてほしいという思いがあるんだ。子どもたちはいつも、地域の人と一緒に仕事ができよかったといわれるそうだ。

「これはまあ冗談なんだけどね」と渥美さんは前置きして、最後にこんなことを話してくれた。「年6回の活動が13年間。単純に計算して78回、7回やった年もあったから80回はやってるかな。その中でね、たった1回だけなんだよ。雨で延期になったのは。だからね、「太陽も俺たちの仲間なんだな」なんて言ってますよ。」

なるほど、渥美さんがいうとおり、この日も良く晴れた日だった。太陽も二俣川を愛し、この活動を支えてくれているということだろうか。人と人、人と川とをつなげてきた渥美さんの言葉には、冗談とはいえ説得力があるような気がした。

二俣川をきれいにする人、その人たちを支える人、そして二俣川で遊ぶ人。川を通して人と人がつながり、人と人のつながりがまたこの川を守っている。こうして巡り巡っていく人の思いは、決して留まることを知らないこの二俣川の流れそのものである。

草を刈り終わった後の「やったぞ」 って達成感が何よりも気持ちいい。

てんりゅう暮らしの見本帖

「二俣川の岸辺をきれいにする人たち」



2年かけて

「だいたい、あまごの養殖ってのは、1年で出荷するんだ。でもね、ここでは2年かけて世に出ていく。だから、おれたちの愛情がたっぷりなんだよね」

そう語るのは、もうここで20年もあまごの養殖をしている、清水さん、鈴木さん。小雨が降る中、長靴を履いた2人は、今日もあまごの様子を心配そうに見に来ます。

4人のメンバーで今年も、およそ4万個の卵をふ化させました。その中で、順調に生育するのは、1万個くらいだとか。「ちよっとしたこと、ダメになっちゃう。それが、汚れなのか、温度なのか。原因はさまざまだね」2年の間には、数々の困難が待ち受けているのです。

暑い天竜区の夏

今年の夏も、とても暑かった天竜区。ここにあまごたちも、がんばってこの夏を乗り越えてきました。「水温が15度を超えると、伝染病にかかりやすくなるんだよね」。

5つある水槽を、毎日欠かさず見守ってききました。水温が上がると、病気が一気に広がってしまいます。「水温、水の量には神経を使うよね。なんとか、この夏はよかつたけど、いつだったかな、何年か前には全滅してしまっただけ。かわいそうだったな」。

つらい思い出も語ってくれました。

あまごにとって、最適な天竜の「水」

「何より、ここはきれいな水があるからね。しかも、冷たい。あまごにとっては、いちばんの場所じゃないかな」そう微笑む目線の先には、大きく育ったあまご。

コンコンと湧いている水を利用したこのあまごの養殖。20年前にそこに目をつけ、清水さんたちが資金や資材を持ち寄り、自分たちでこの養殖を始めました。

「まったく、割に合ったもんじゃないよ(笑)。趣味っていうか、楽しみっていうか。まあ生きていく、張り合い、かな」

自宅の車庫も、いつの間にかあまごのための倉庫に。「これがふ化させる道具で、これが、エサをあたえる道具で…」車は肩身が狭そう。

水も大事、

でも「楽しさ」はもっと大事

手間がかかり、気も使い、しかも、儲かりもしない。でも、どうして、皆さんは続けているのでしょうか？そんな愚問を投げかけてみました。

「あはは、そうだよな。でもね、みんな楽しそうにやってるんだよ。腰や肩や、みんなどこかしら痛いんだけど。最終的に、出荷するのは9千匹くらいかな。いろいろな所へね。その時に、いいアマゴだねとか、きれいだねとか喜んでもらえる。その時は今までの苦勞が、一気に吹き飛ばよな」

この冬、また4万個の卵をふ化させる皆さん。「腰は痛いし、指先は冷たいし、ほんと割に合わんな…」でも、やっぱり笑顔なんですよな。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

あまごにとって水は大事、 でも「楽しさ」はもっと大事。

てんりゅう暮らしの見本帖

「あまごの養殖をする人」



幼少期の思い出

餅かすりの着物を着てモンペ姿で過ごした子どもの頃の情景を、小塩さんは今でもよく思い出すという。「お手伝いで、清水井戸から家のカメに、バケツで水を運んでね」どの家も、それが子どもの仕事だったという60年ほど昔のことを、懐かしそうに話しはじめた。

昔は家の中に水道がなかったため、この井戸水を生活用水として、今の水道水と同じ感覚で使っていたという。「そろそろ自分の番かなあと、家の中から様子を伺っていましたよ」混み合っている時は、水源が空くまでそうして待ち、洗濯物や野菜を洗ったり、果物を冷やしたりするだけでなく、お茶をいれ、お米をといで炊くことにも使っていたそうだ。

「もう随分昔からあるけど、私知っている限り、渇水期でも枯れたことはないし、水量が少なくなった時でも出続けていたわねえ」そう記憶をたどって教えてくれた。

井戸が果たしてきた役割

集落の女性が入れ代わり立ち代わり、洗濯物をすすいだり野菜を洗ったりの水仕事をするこの井戸は、女性たちの集会所であり、たまり場であり、まさに井戸端会議の場だったという。

「母親からこんな話を聞きました」お嫁さんのことを話すお姑さん、嫁ぎ先のお姑さんのことを話すお嫁さん。小塩さんのお母さんは、よく相談相手になっていたそうだ。たまたま両者の間に入って聞いてしまっても他言しないという信頼関係の中で、ここは日常の悩みを相談で

きる唯一の場所なんだよ、と教えられたそうだ。「家族をつなげ、地域もつなげる。大事な水源であること以上に、そんな役割を果たしてきてくれたこの井戸は、集落にとって重要なものだと思うの」

春夏秋冬 暮らしに密着

井戸水は、夏は冷たく、冬は温かい。手に触れる水が冷たく感じ始めたことでそろそろ夏が来ることを、ぬるく感じ始めることで冬が近づいたことを、季節の変わり目が井戸水によって体感できるんだ、と小塩さんは笑って言った。

「掛造り」といわれ、この地域独特の建て方になっているご自宅に伺わせてもらった。自動車が行き交う道路に面した玄関を入ると階段があり、階下の空間へと続く。物置などにして使っているそうだが、その階にある出入口は裏へと通じている。「ここは、ひんやりして冷蔵庫みたいなのよ」道路側の地下部分にあたる石積みに触れてみると、確かに冷たい。井戸と同じ水脈が近くを流れているため、この半地下の空間は、夏でもあまり暑く感じないらしい。

今ではこの井戸を利用している家も6、7軒に減ったというが、年に1回の掃除は使用している住民みんなで、協力してやっているという。「世代が変わっても、変わらない絆がここにはあるんです」水窪が大好きだという小塩さんのすっと伸びた背筋は、地域への愛着や誇りを物語っていた。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

世代が変わっても、 変わらない絆がここにはあるんですよ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「井戸水で野菜を洗う人」



自分たちのまちは 自分たちの手で守る。

いつとき廃れたようにも感じられた「地域のために」「誰かのために」という考え方が、東日本大震災の発生を機に見直された。こうした意識は「絆」という言葉で語られ、その大切さについて多かれ少なかれ、誰もが考えることとなった。

——自分のまちを守るために、自分たちにできることは。

震災により、地域を守る活動の代表ともいえる消防団の存在も再び注目されるようになった。しかし、一方で現実には、団員数の減少に歯止めがかからず、消防団活動を取り巻く環境は、依然として厳しい状況が続く。このことは、人口減少が著しい天竜区においても同様だ。

「地域住民の生命と財産を守る」

気高き使命を背負う消防団員たち。これに加えて天竜区の消防団員は地域のさまざまな活動に参加し、汗を流している。今回、取材をしたのは、ふるさとの清流「阿多古川」を守る活動に取り組んでいる消防団員たち。「生まれ育った自分たちのまちだから」。あえて口にする者こそいないが、こうした崇高な思いが彼らの活動の根底にある。

ある時は、水により住民たちの生命を

守り、またある時は、地域の財産である水資源を守る人たち。天竜区の水とともにある暮らしとして消防団員たちの活動を紹介することとしたい。

地域に与える安心感

8月31日、朝7時30分。暑さの盛りは過ぎたとはいえ、じっとしていても汗が出るような8月最後の日曜日、阿多古川の土手沿いに消防団の赤い車両が4台並んでいた。ヘルメット姿の団員たちが、重たそうな可搬ポンプを数人で河原まで運び下ろしている。

この日は、月に1回のポンプの試運転を行う日だ。消防団員たちは、それぞれに仕事を持つ傍ら地域の活動に参加している。土日に仕事がある団員も少なくないため、活動時間を出前に設定することもしばしば。そうでなくても、20代、30代が中心の消防団である。各々、家族と過ごす時間なども大切にしたいため、こうした時間の方がむしろ都合がよいようだ。

有事に備えて、不具合などがないよう資機材などを点検しておくことも消防団の大切な仕事。とはいえ、休日の朝から愚痴の一つもないものかと作業中の団員たちに話を聞いた。ある団員は「まあ、消防団が好きか嫌いかといわれたら、何とも言えないですけど…でも、こんなことでもない、地元の人と会える機会もないですからね」と笑って答える。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

中学校や高校の先輩、後輩が入り乱れた年齢構成となっている消防団ではあるが、今ではそうした上下関係も学生当時は異なる。「中学の頃は、一つ歳が違っただけで、怖い人もいたんですがね。今はみんないいおじさん。居心地も悪くないですよ」と先ほどの団員。確かに和気あいあいとした雰囲気だ。

消防団員たちが点検を行う間、近くに架かる橋の上を、散歩途中の人たちが通りかかる。多くの人は、河原を見ながら団員たちに「朝からこくろうさま」「大変だねえ」と声をかけていく。こうした光景から、地元の人たちの消防団への期待と感謝の気持ちを感じることが出来る。若者たちが一生懸命がんばっている姿は、住民たちに大きな安心感を与えているはずだ。

同郷という特別な空気感

1時間ほどのポンプの点検作業を終えた団員たち。今度はその足で、地元の環境保全団体とともに河川パトロールと清掃活動を行うため、地元公民館に集合するのだという。休日にもかかわらず、なかなか出番が多い。

口では文句をいいながらも、結局、多くの団員はこちらの活動にも参加する。「人が少なくなっていますからね。できることをできる人がやるだけです」と一言。別の予定があればそれを優先する。今の時代に合ったやり方で、参加は自由意思とのこと。たださえ、若い世代の加入が少ない昨今。活動の参加に対して無理強いするようなこともない。

子どもの頃から見てきたけど、 こんなにいいところだったかな。

てんりゅう暮らしの見本帖

「地域の生命と財産を守る人」

午前9時、公民館の駐車場には地域住民50人ほどが集まっていた。その中には、ヘルメットを脱いだ団員たちの姿もある。これから1時間ほどかけて、川や道路、周辺の田んぼなどに捨てられたゴミ拾いをするそうだ。

ゴミ袋を片手に団員たちは、空き缶やバーベキューの燃えかすなどを集めて回る。中には、子ども連れで参加する団員もいた。せっせと手は動かしながらも、団員たちは家庭のことや世間話、パチンコの戦績から仕事場の苦労までさまざまな会話で盛り上がる。

のどかな田園風景に差し掛かるとある団員が「ど田舎って感じだなあ」と笑う。「こないといとこだったかな。ずっと住んでるけど気づかんもんだね」と別の団員。途中で沢ガニを見つけたら、子どものような表情に変わり、よく遊んだ川に差し掛かると、当時の武勇伝が披露される。同じ場所ですごったからこそできる地元ならではの話しに花が咲いた。

作業が終わると、集まったゴミが山のようになっていた。中には大きな鉄くずの固まりまである。それでも地元の人からは「今日は少ない方だよ」との声。平成の名水百選にも選ばれた清流・阿多古川は、住民たちの努力によって守られているのだと改めて知った。

活動を終えた団員たちはお茶で喉を潤しながら「たまにはいいね」と笑顔。見返りを求めない彼らは、よく冷えたお茶だけで十分という表情をしていた。



霧立つまち「龍山」

天竜区の中でも、急峻な場所が多い龍山町。山々に張り付くように集落が点在し、その多くの場所では、天竜区の特徴「大天竜」の雄大な流れを望むことができる。また、龍山町は年間降水量がおよそ2500ミリと、雨が多い土地柄でもある。区内に住む人たちの中には「雨の通り道」というイメージを持つ人も少なくないようだ。自然の恵みである雨は、龍山の主要産業である林業や茶業などを支えてきた大切な存在でもある。

そしてもう一つ、龍山の気候で特徴的なのが霧の多さだ。天竜川やその支流から湧き立つ霧は、この地に住む人たちの生活を語る上では欠かせない存在ともいえる。実際、住民の中には「龍山といえは霧」と私に語ってくれた人もいた。

このように、水とは関連が深い龍山で、この地ならではの暮らしを探る中、「霧穴」という全く聞き慣れないものの存在を耳にした。

霧が吹き出す穴？
はたまた、霧の立ちこめる洞窟？

いろいろなイメージが頭を巡り、当然のことながら本物の霧穴が見てみたくなった。地元の話では、どうやら霧穴とは、種芋などを保管している穴のことのようだ。いずれにしても、やはり百聞は一見にしかず、である。龍山で霧穴を

日常的に使っているという人を調べ、実際に訪ねてみることにした。

謎の穴の正体を訪ねて

11月初旬、龍山町大嶺の岩明地区に住む生田さんを訪ねた。生田さんは、70代後半の男性。優しい笑顔のお父さんだ。詳しい話を聞く前に、そのものを見た方がよいのではと、さっそく霧穴のある山中まで案内してくれた。雑木林の中をしばらく歩くと、視界が一気に開けた。眼下には天竜川。龍山では幾度も同じような光景を目にしたが、何度見ても見飽きない。日々、この風景の中で生活している人たちをうらやましく思った。

さらに山の中を進むと、生田さんが「これが霧穴だよ」と指差した。電気柵で囲われた場所にトタンがかがせられている。生田さんがトタンをよけると、4つほど穴が顔を出した。一つの穴は、およそ直径1メートルといったところだ。

「最近では、イノシシやらシカやらが増えて困ったもんだ」と生田さんは苦笑いした。霧穴を取り囲むように設置された電気柵も生田さんが自ら手掛けたものだという。なかなか手間のかかる仕事だろうと想像した。

霧穴に近づいてみると、深さ1メートルほどの穴の中にシヨウガの種が保管されていた。11月に取材することにしたのは、種芋となる里芋の収穫がこの時期と聞いていたためだったが、少し時期が早

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

かったようだ。生田さんは「残念。種芋はこれからだな」と笑った。自然が相手だ。こればかりはしょうがない。

穴の中を見ると、表面の土がしっとり濡れている。生田さんは「霧穴といっても、目に見えるような霧が立つわけじゃあないんだよ」と言った。それでも穴の中は、霧が立ちこめているかのごとく、年中一定の湿度と温度が保たれるそうだ。これは山にしみ込んだ水分が関係しているものと考えられる。実際に雨が多い龍山らしい。

誰かのために生きる

生田さんの家まで戻り、その軒先で話の続きを聞いた。生田さんが住む岩明地区は、標高200メートルほどの山の上。この地区を下ったところには、霧窪と呼ばれる場所もあるそうだ。

「毎日、山の上から見ると、霧で気流の流れが分かるんだよ」と生田さん。「あっちから、まとまった固まりがくると天気が悪くなる」と遠くの山を指差しながらいった。「霧穴もそうだけどね、昔の人の知恵なんだろうな。どこかでそういう知識を得てね」と自然と共に暮らしてきた先人たちに敬意を払った。生田さんの霧穴も、三代前の先祖がその場所を見つけて掘り、今に受け継がれたものである。「100年はゆうに使っているね」とその歴史の長さを話してくれた。

天然の貯蔵庫である霧穴。昔はあちこちにあったとそうだが、今ではあまり見かけなくなつたという。今でも現役の生田さんの霧穴

ここは何ととっても霧、昔の人の知恵なんだろうな。

てんりゅう暮らしの見本帖

「霧穴で種芋を保管する人」

は、近所の人たちの種芋の保管にも使われている。「まあ特段、貸してるとか感
覚はないんだけどね。入れば入れていい
よっていうだけだね」と生田さん。こ
ういう寛容さが田舎のよいところだ。共
で使用しているとはいっても、先ほどの
電気柵をはじめ、周辺の草刈りなどの管
理は、生田さん一人でやっている。こ
うした作業をいとわないところも、田舎に
住む人の人間力である。

生田さんとは、集落内の生活環境の維
持にまで話が及んだ。かつては23世帯あ
ったという岩明地区だが、今では10世帯
にまで数が減り、高齢化も進んだ。周辺
は、茶畑や森林などで囲まれているため、
手入れをする人がいないと一気に荒れ果
ててしまうと生田さんは心配する。現役
時代から山仕事や茶業に携わってきたと
いう生田さん。今は草刈りや茶の木の剪
定などを近所の人たちから頼まれること
も増えた。

「頼まれると断れんだよ」と生田さん
は苦笑いとも、困り顔ともつかない表情
でいった。「よそのことだからって、ほ
つとけばみんな住めなくなっちゃうし
ね。やれるうちはやるだけだな」とも語
る。多くの人が頼りにしてしまうのは、
生田さんの人柄があつてこそだろう。

誰かのために労を惜しまない生田さん
の生き方には頭が下がる。単に田舎の人
とひとくくりにするのは、やや乱暴かも
しれないが、田舎の人を象徴するよう
な温かな人に出会えて本当によかった。



山に生きるものとして

「山のことをもつとたくさんの人に知ってほしい。でも、あんまりこの場所のことは知られなくなかったりもするんだけどね」と追平さんは笑った。その場所は、春野町田河内の山の中にある「樽山の滝」。この日、追平さんを訪ねたのは、秘境にあるというこの滝を案内してもらったためだ。

その道中は、間伐が行き届いた山林の中にある林道。管理は、山仕事を生業とする追平さんの仕事によるものだ。「林業も機械化が進んでね。昔に比べると効率も上がったんだよ」と追平さん。天竜美林を有する天竜区だが、なかなかここまで手の行き届いた山の中を歩く機会は少ない。

「僕たちは、水源となる森を守らなければいけない」と追平さんは言う。それが山に住む者の役目だと。その一方で「下流部にあたる都市部の人たちには、自然の恵みを実感し、できれば応援してもらえたらいいんだけどね」とその思いを語ってくれた。最初に追平さんがいった「山のことを知ってほしい」とは、ここに住む人たちと、その暮らしも含めてという意味なのだろうと思った。

自然の恵みに感謝して

林道を歩くこと30分。先ほどまでは静かだったが、遠くの方で滝が流れ落ちる音が聞こえてきた。「もうすぐそこだよ」と追平さん。後をつけて杉林をさらに進むと、突然、目の前に落差20メートルほどの見事な滝が姿を現した。なるほど、確かに秘境という言葉がふさわしい場所だと納得した。追平さんの話では、これが一の滝。さらに二の滝、三の滝があるのでさうだ。「樽山を螺旋状に水が流れているんだよ」と、山の方を指差しながら追平さんは教えてくれた。

しばらくの間、何を考えともなく、絶えず流れ落ちる滝に見入った。木漏れ日が差し込み、水しぶきがきらきらと光る。滝の脇には小さな祠があり、水神様が祀られていた。30年ほど前に地元の人が設置したそうだが、以来、渇水に見舞われることもなくなったという。こうした話一つをとっても、この地に住む人たちが、いかに水を大切にし、その恵みに感謝しながら生きてきたかをうかがい知ることができる。

豊かな生活とは何か。

先ほど来た道を帰りながら話しは続く。兼帯を腰につけていた追平さんは、その道すがら、目についた木の枝や草をなただ払いながら進んだ。「道具は大切にされますか」と尋ねると「農家なら鍬や鎌、山仕事ならのこぎりとなた。生きるための道具は大切にしなければ」と答えてくれた。

「昔はテレビゲームなんてなかったからね。子どもの頃から、遊び場といえば山。道具の使い方も、手入れの仕方自然と覚えたもんだよ」と笑った。今は「刃物は危険」と子どもたちに使わせないことが多いが、本来は道具を使う中で、その危険性を知ることが大切なのかもしれない。かくいう自分もなたの使い方がわからない。前を行く追平さんを見ると、こうした道具に触れてこなかった自分が恥ずかしく思えた。

しばらくすると、ふと思いついたように追平さんが切り出した。「何が豊かな生活かは分からないけどね」と前置きし「仮に稼ぐお金が少なくても、山の恵みをいただきながら暮らす、この生活は豊かな暮らしだと思うんだよ」と続けた。そして、山里の魅力を伝えるために、自分は山を守り、これに感謝して生き続けたい、とも。ふるさとに誇りを持つ人の言葉だからこそ、その言葉にも説得力があった。追平さんの後を追いながら、その言葉がしばらくの間、私の胸に響いた。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

山の恵みをいただきながら暮らす。 ここの生活は豊かな暮らしだと思うよ。

てんりゅう暮らしの見本帖
たるやま
「樽山の滝を見守る人」



昔ながらの技術を受け継ぐ「手漉き和紙」。一枚一枚丁寧に手作りされた和紙にはただの紙とは言わせない驚くべき特性和奥の深さ、ただの道具では終わらない温かさがある。私たちは、天竜区西藤平で紙漉きを続ける阿多古和紙職人の大城さんを訪ね、自身の仕事への思いなどを伺うことにした。

和紙の値打ちは、これから出てくる

紙漉きについても和紙についても全く不案内な私に、大城さんはとても丁寧に説明してくれた。機械で作った紙は2000年ほど経つとポロポロになってしまふといわれている。それに対して、手漉きの和紙は1000年もの間、保管することができるといふのだ。1000年前の古文書などが発見されているのを考えれば、この事実には納得である。

和紙の丈夫さ、保存性の高さは、現在、海外でも注目されているそうだ。紙漉きの技術は日本以外にもあるというが、日本の「流し漉き」という技法は、繊維が重なり合うことで、とりわけ丈夫な紙に仕上がる。驚いたのは、和紙はしわになつたら、アイロンをかけることで元通りのきれいな紙に戻るといふこと。大城さんの説明を聞くと、私たちが良く知る「紙」と「和紙」は、似て非なるものといった印象さえ受ける。

一枚一枚手漉きをした和紙は、何といつても目に見えない温かみが魅力だ。そして、それとは別に、目に見える驚くべき高い機能性も和紙の特長なのである。

紙を使ってくれる人の声が紙の質を良くしていく

和紙の原料となるのはコウゾの木の皮。その中でも白い部分だけを使う。したがって、採れる量が少なく原料はとても貴重だ。特に国産のコウゾは、価格も高いため、現在は、タイから輸入したものが主流となっている。タイのコウゾは枝が太く原料を多くとることができ。しかし、その代わりに繊維の一本一本が太いという欠点もある。すると、出来上がった紙はにじみやすくなってしまふ。「こんな話は、使ってくれる人でないと分からないことだ。漉いている方からは、実際に使ってみてどうかは分からない。使ってくれた人の感想が紙作りにも反映されるので」と和紙を作る人がいれば、その和紙を使う人も当然いる。使ってくれる人の声を取り入れながら、より良い紙を作る。そんなところに職人としての横顔をのぞかせた。

手すき和紙の未来を憂う

大城さんは毎年、地元の小学校で行われる紙漉き体験の講師を務めている。子

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

どもたちも毎年行っているからだろうか、上級生のなかには慣れた手つきで木枠を扱う子もいる。今年初めて体験する子も上級生の様子を見て、見よう見まねで挑戦する。大城さんはその様子をそつと横で見守っていた。

「製品としての紙を作るとなると、全て同じ厚さに漉かじゃあ、ならんで。原料が濃い水のとときも薄い水のとときも同じ厚さに漉かなきゃならん」。同じ漉き方では、水の状態によって厚さが変わってしまう。水に溶ける原料の濃さに合わせて漉き方も調節しなければならぬ。そこは長年培ってきた技術というものだろう。大城さんはさつと木枠で水をすくうと「だいたい3回」と言いつつ漉く。大城さんの動作を見ていると簡単そうだが、そんなうまくいかにない。ましてや、同じ厚さに漉き続けることは、そう簡単にできるものではないようだ。

子どもたちが楽しそうに紙を漉く姿を横目に、今後直面するであろう阿多古和紙の技術継承の難しさや、将来への課題について思いを巡らせた。しかし、子どもたちが、その楽しさを知ることが未来への第一歩でもある。

挑戦を続ける

「ここいらの集落は、みんなで開拓した場所だね。道路なんかも自分らで作ったり直したりしてきたんだ」。大城さんは集落での暮らしについて話してくれた。集落には9軒の家があるが、皆仲が良く、掃除なども一緒にやっているそうだ。「この場所には、子どもの頃からいろんな思い出があつてのう」。そ

「今年もできた」だから「まだやれる」
って気持ちが励みになる。

てんりゅう暮らしの見本帖
す
「阿多古和紙を漉く人」

言って話し始めた大城さんの思い出話は留まることを知らない。

今でも田んぼをやっているという大城さんは言う。「いつも、『今年もちゃんとできるだろうか』と不安になるんだ。すると奥さんも『この人、本当に気に病むんです。昨日も運転免許の更新があつて。今回も大丈夫かなってずっと気にしてた』と隣で微笑んだ。続けて大城さんは言う。「でも『今年もできた!』ってことが、何よりも励みになる。心配した分、ちゃんとできた時は、何より気持ちいい。『まだやれる!』って気持ちになれるんだよ」今はこうやってやれることを一つひとつこなしていくだけという大城さん。その語り口には、まだまだこれからという力強さを感じさせた。

伝統の技で生み出され、驚くべき性能を秘めた阿多古和紙。その価値はこれからも注目を集めていくことであろう。しかし、その未来には課題も山積みである。大城さんは「手漉き和紙の良さというものが、正しく認識されていないのではないか」と思っている」と語ってくれた。「今となっては、和紙の売り場はない。売ったとしても安いので漉き賃が見合わない。さらにこれからの後継者がいない」。それでも大城さんは今日まで紙を漉き続けてきた。この地で阿多古和紙と人生を共にしてきた大城さんの挑戦は、まだまだ続いていく。



日本の美、棚田を訪ねて

棚田は美しい。棚田と聞いて、ある人は月夜に照らされた鏡田を思い浮かべるかもしれない。また、ある人は黄金色に輝く実りの秋の風景を連想するかもしれない。棚田はさまざまな表情を持つ。その一つ一つが、日本の美を象徴する風景だ。そして、天竜区にも誇るべき棚田がある。先人たちが今に残してくれた大切な財産だ。

5月の終わり、今年の田植えの日取りを知らせるEメールをもらった。棚田のある生活とはどんなものだろうか、棚田を育てている人はどんな生き方をしているのだろうか。メールを読み終えて、私はしばらく初夏の棚田の風景に思いを巡らせた。直接、そんな質問を率直にぶつけてみたいと考えながら。

6月の半ば、朝早くから、天竜区大栗^{おおい}の本村地区にある集会所前には50人ほどの人が集まっていた。毎年、都市部などから人を募って棚田の田植えを行っている。参加者は子どもから年配の人までさまざま。今年は、市内中心部にある大学の学生たちの顔もある。この会を主催するのは大栗安棚田倶楽部。十数年前に集落の全世帯によって結成し、地域の宝である棚田を住民自らの手で守る活動を続けてきた。

この日の天気は梅雨明けのような快晴。梅雨入りは発表されていたが、それ以降まとまった雨は降っていない。標高

およそ450メートルに位置する大栗安の棚田にとつては雨が命だ。ある地元の人「山間部は、梅雨を相手に仕事しているんだよ」といった。その言葉どおり、本来、水が満遍なく行き渡るべきこの時期に、いくつかの田んぼは干上がったままの状態になっていた。「仕方ない。僕たちは、自然のサイクルに合わせて生きるしかないですからね」と話してくれたのは棚田倶楽部の代表、鈴木さんだ。

暮らしとともにある棚田

鈴木さんは、棚田での米作りをはじめ、しいたけ栽培、茶業、林業などを生業としている。その一年は、まさに自然のサイクルとともにある。例えば5月からの茶摘みシーズンが終わる頃、季節は梅雨に入り、棚田の田植えの時期を迎える。農閑期となる冬には山に入り、間伐など木の手入れを行う傍ら、しいたけの栽培を手掛ける。その間には、田んぼの畦の補修や茶畑の管理などやるべきことは尽きない。一年間を通して暇になる時期などないという。

鈴木さんに棚田と共にある生活について真っ先に質問すると「そうですね。いい面も悪い面もありますよ」と答えが返ってきた。「見てのとおり、この風景はどこにでもあるものじゃないですよ。田植えの後も素晴らしい、見渡す限り黄金色の風景が広がる秋もいい。秋は刈り終えた稲がそれぞれの家の前で干され

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

る、はざかけも風物詩。冬は雪が降れば幻想的な景色に変わる。四季折々でさまざまな顔を見せてくれます」と続けた。この地に住んで26年になる鈴木さんにとつて、棚田は遺跡に匹敵する文化遺産であるという。しかし、一方で「代々受け継がれてきたこの風景を守ることは容易なことではない」とも。現在、この集落には11世帯を残すのみ。高齢化も進んでいます。棚田での作業は、機械化が難しく手作業がほとんど。重労働であるにもかかわらず収益性は決して高くない。苦労が多いんです」。そう語る表情からその切実さが伝わってくる。「山の暮らしは楽じゃない。でもね、自給自足ができる。毎年思うんですよ。ああ、今年もまた何とか食えたなっ。そういうと先ほどまでの真剣な表情がやっと少し和らいだ。

ここで生きるというプライド

「こうやって都会の人と一緒に汗を流すのは、大栗安のことを多くの人に知ってもらいたいという思いもあるんです。それに僕たちだって、未来に夢や希望を持ちたい」。慣れない足場での作業に悪戦苦闘しながらも、手植えでの田植えに奮闘するボランティアの人たちに目を遣りながら、鈴木さんはそう話してくれた。「田植えは初めて」とはりきっていた大学生たちは、これまで触れたこともないであろう田んぼの泥の中で生き生きとした顔をしている。田植えに飽きた子どもたちは、虫取り網と虫かごを持って迷路のように入り組んだ棚田の畦を駆け回っていた。生き物た

僕たちは、自然のサイクルに合わせて生きるしかありませんから。

てんりゅう暮らしの見本帖

「棚田を守る人」

ちの宝庫でもある大栗安の棚田。目の前で映画のワンシーンのような時間が流れる。「インターネットでは、どうしても伝わらない魅力があるんですよ。泥が足の指を通るヌメツとした感覚なんて、実際に体験してみないとね」鈴木さんは笑いながら言った。

棚田は美しい。美しいものには必ず理由があるが、大栗安の棚田の美しさは、それを守る人たちの日々の苦勞とその苦勞に勝るプライドが支えている。「やれるうちは、手がかかって今ものやり方を続ける。棚田はもちろん、先人たちの知恵も大切にしたい」というのが鈴木さんのプライドだ。秋に収穫された米は「棚田米」というブランド米として地元米屋で販売される。「お茶にしても、米にしても、ありがたいことに高い評価をいただいている」と鈴木さん。「皆さんの評価がここで生きる支えになっている」と付け加えてくれた。「すべては、きれいな水と澄んだ空気という自然の恵みのおかげ」という言葉が、自然に対して謙虚でありたいという鈴木さんの生きる姿勢を示していた。

別れ際、鈴木さんは「大栗安って、面白いところでしょう」と笑顔で尋ねてきた。私は、大きくうなずいて秋の稲刈りの時期に改めてこの地を訪ねることを約束した。

大栗安、棚田、そして、そこに住む人たち。どれも確かに面白い。



祖父から受け継いだわさび田

その石積みは、人の手が加わって整然と並んではいるものの、周囲の山林に調和し、程よく自然の一部になっていた。石を伝い流れ落ちる水は、上部の山々から集まってきているようだが、どこからともなく湧き出て、わさび田へ注いでいる。

伊豆地方によく見かけられるわさび田をイメージしていたが、それとはまた趣が違うものだった。伊豆がのんびり、穏やかというなら、急こう配の斜面に作られているこのわさび田は、素朴であり力強さを感じる。

「おじいがやれって。そのレールに乗ってるだけ」望月さんは、わさびを手に取りながら言った。このわさび田は、明治の頃からのもの。昭和初期に静岡市出身で、わさび製造にかかわっていた望月さんのお祖父さんが引き継いだそう。望月さん自身は20歳の頃からわさび田の世話をしているということだ。

自然の恵み 自然との闘い

乗用モノレールで、わさび田の上段部分まで上らせてもらった。わさびを育てるには直射日光を避けなければいけないが、ここは木々が作る影が天然の日除けになっている。見下ろしたこの急峻なわさび田は、一体どのように手入れをしているのだろうか。

望月さんは軽々とわさび田の際に立ち、その場で踏ん張って、わさびを抜いた。「ここは、索道を引いて現場石を使ってわさび田を造ったんだ」石積みの補修も、自分で石を運んできて積み上げ、コンクリートで整えた部分があるという。

また、土壌作りの様子も教えてくれた。つる

はしで掘って、鋤で起こしてといった作業や栽培方法などは、伊豆の知り合いに教を請いにいくそうだ。交流して、いろいろなところから知識を得ないとなあ、と望月さんはつぶやいた。

自分でやらなきゃ、しょんないわい

そして、「イノシシが・・・」と言葉を続ける。よく見ると、わさび田と山林の境界に電気柵と防護柵が施されていた。最近、作ったものだから、イノシシがミミズやサワガニを捕りたいがために、石積みを壊すという。中山間地域すべてに共通する鳥獣被害である。自然の恩恵を受けていることもあれば、自然と闘わなければならないこともあるということだ。

わさびは、1年半から2年近くの年月をかけ、栽培する。春に苗を植え、翌年秋に収穫することになるという。「石積みに近い、際に生えているものの出来がいいなあ。水が流れるから酸素もよく通る。だから根が張って立派になるんだ。肥料はやってないよ」もうすぐ収穫間近だ。大部分は市内や近隣の漬物屋に出荷するそうだ。加工品は作らないのか聞くと「この前、頼まれてわさび漬を作った」茎はこう切って、塩は3%程度で、と望月家直伝の作り方を教えてくれた。水窪町内のスーパーや森林組合の売場に、数量が限られるが置いているという。なかなか手に入らないが好評だそうだ。

「自分でやらなきゃ、しょんないわい」当たり前のことだが、なかなかできないことをさらっと言ってにっこり笑った。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

自分でやらなきゃ、 しょんないわい。

てんりゅう暮らしの見本帖

「わさび田を世話する人」



自然、森、木、緑、山。

「天竜区らしいもの」といえば、一にも二にも森林である。ここに住む人であれば「森に囲まれたところ」だと自分のまちを一度は紹介したことがあるはずだ。「自然」「森」「木」「緑」そして「山」。言い方はさまざまだが、とにかく我々のまちの象徴は、森林に他ならない。

日本三大人工美林の一つである天竜美林は、先人たちの手によって作り上げられた大切な財産だ。しかし、一方で昭和50年代をピークに木材価格は低下し、山の仕事・林業は、長い冬の時代を迎え、現在に至っている。

森林は、大きく分けて2つの面で捉えることができる。一つは産業を支える「経済林」。もう一つは、私たちの暮らしを守るという意味での「環境林」である。現代は、言うに及ばずエコの時代、環境の時代だ。森林は、水や空気を生み出す源として、改めてその機能と重要性が見直されることとなった。

話を天竜区のことに戻す。

天竜美林に降った雨は、地下に浸透していく間に過され、水質の浄化が行われている。この水は天竜川に流れ込み、その下流域である静岡県西部100万人の飲み水となっている。その範囲や規模を考えると、天竜区の森林の果たす役割は極めて大きい。

私たちが、水とともにある天竜区の暮

らしを語るとすれば、森林に携わる人の存在は、そのど真ん中に位置するものであると早い段階から考えていた。

今回、取材に協力してくれた伊賀さんは、木こりとして35年ものキャリアを持つベテラン。森林と水、そして生命を守る山師にその仕事のことなどについて話を伺うため、伊賀さんを訪ねた。

切りたての丸太に腰掛けて

現場近くに到着すると、チェーンソーの轟音が聞こえてきた。しばらくするとエンジン音が鳴り止む。私たちが到着したことにどうやら伊賀さんの方が気付いてくれたようだ。

赤いチェーンソー片手に私たちのところまで来てくれた伊賀さんは、フェイスガードの付いたオレンジ色のヘルメットに、チャップスと呼ばれるプロテクターといういでたち。何だか格好いい。最近では、山の仕事に関心を持つ若者が少しずつ増えているようだが、こうしたばつと見のルックスも若者を惹き付ける魅力の一つかもしれない。

「立ち話でも何だから」と伊賀さんが道端の丸太に腰掛けた。この木も先ほど伊賀さんが切ったばかりのものだ。

伊賀さんが一息ついたところで、さつそく山について聞いてみるが「今はいい時代じゃないからね」と率直な思いを返してくれた。「でも、仕事そのものが嫌いなわけじゃない。少なくともデスクワークよりは向いていると思う」と笑った。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

もともと田んぼや茶畑に囲まれた環境で育ったため、体を動かす仕事に就くことが自然な流れだったように思うと伊賀さん。大学卒業後、地元に戻り、人の紹介で龍山の森林組合に入ったそう。当時、林業がまだまだ元気な時代だった。「その頃と比べると山の仕事のあり方も変わった。昔みたいに皆伐することもほとんどなくなっただけね」。伊賀さんは、目の前の木々を見ながら呟いた。

職人の魅力

厳しい時代ではあるが、一方で環境時代が到来したことで、その重要性が再認識されるようになった林業。このことを伊賀さんは「水を蓄える機能を持つ森林は、木に携わる自分たちだけでなく、下流域の人たちにとっても大切な存在になった」と語ってくれた。

しかし、その森林を守る最前線にいたいことについては「現場で木を切っているときは、そんなに難しいことは考えないもんだよ」と笑う。とはいえ、もちろん考えなしに木を切ることなどできない。周囲の状況や安全面などには細心の注意が払われる。加えて、職人の知識や経験、技、勘、集中力といったものが、目の前の1本の木に注がれる。

机の上で考えるようなことを聞くのが何だか野暮やぼに感じられてきたので、木を切り倒す感覚を聞くと「狙いどおりにいけば気持ちがいいもんだね」と山の職人らしい答え。職人的といえば、長年、木を見続けてきた目は、木の肌を感じや枝の形、太さなどでだいたいの木の年数が分かるのだそう。「木も生き物。長く関われば何となく相手のことが分か

木を切っているときは、 難しいことは考えないもんだよ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「森林を育て、守り続ける人」

ってくるものだ」と伊賀さんは言う。こういう話はとても面白い。

おそらく、都会の若者たちの中に林業や農業に関心を持つ人たちが増えているのは、こうした自然の中で生きる力や技が魅力的に映るためではないだろうか。もっと単純にいえば、こうした生き方が、何だか格好いい。のだろう。

実際、ここ数年、伊賀さんの周りにも、林業を志す都会の若者が増えてきているそう。林業分野においても、後継者問題は大きな課題の一つ。この流れは決して悪いことではない。ただ、伊賀さんは「都会の子たちはすぐに木を切りたがるんだよね」とも笑う。「木を切る作業が一番派手で面白そうに見えるのかもしれない。でも基礎も大事なんだけどね」。

「木の一生は、人の人生よりも長い。長い目で考えなきゃね」と伊賀さんは言う。スピードや効率ばかりが物差しにされる時代だが、山で生きる職人として、また、先人たちが作り上げた森林を守り続けるものとして、真摯にその役目を果たそうとする生き方が、短い言葉の中に込められている。山も山仕事も一日にしてならず、というわけだ。

日々、何気なく見ている天竜の山々も長い年月によって作られた財産だ。私たちはもっとそのことを誇るべきなのだ。山の職人に話しを聞いて、その思いを改めて身に染みて感じた。



神秘の池と舟屋台

7月下旬、天竜区春野町和泉平地区の皆さんが心待ちにしている出来事がある。お祭りだ。

この祭りが行われる新宮池は、標高500メートルの山頂付近にある。池には舟屋台が浮かべられ、祭りは神秘的な雰囲気包まれるという。地域のつながりを語る上で欠かせない祭りだが「山頂に湧く池」と「舟屋台」というキーワードが面白い。私は、和泉平の人たちの水とともに暮らすに興味を引かれ、新宮池の夏祭りに出向いてみることにした。

祭り当日、午後3時30分、地元の若衆は、和泉平公民館を出発し、新宮池へと向かう。手製のミニ屋台に太鼓を乗せて、楽しげに引きまわす。威勢のいい掛け声、笛太鼓の音が山々にこだまする。およそ2時間かけて山頂の新宮池に到着。いよいよ祭りの本番だ。

新宮池の傍らにある新宮神社では、神事が古式ゆかしく行われ、若衆は水面に浮かべられた舟屋台に太鼓を積み込み、舟を出す準備をしていた。

**お祭りの楽しみ方は人それぞれ。
それでいいんだ。**

徐々に地元客や見物客なども続々と集まって来た。絵になる光景にカメラマンが多数カメラを構える。夕暮れ時の水面に浮かぶ舟屋台を美しく撮

影しようとして、黙々とファインダーを覗いている。きつと腕自慢なのだろう。

セミの声に冷涼な風が体をすり抜けてゆく。池のほとりに腰を落とした私は、その一瞬の静寂に心が透き通るような感覚を覚えた。それも束の間、かじ棒を立て、舟が漕ぎ出された。祭囃子が掛け声勇ましく水面を舟が練る。皆の心が高ぶってゆく。

「昔はここにいっぱい人がいたけど、少なくなつた」池のほとりで見物しているおじさんが言う。おじさんはこう続けた。

「いい祭りだろ」

「そうですね」自然と答えた。何よりも全体が醸し出す雰囲気素晴らしい。集落の人々は、来客を受け入れる深い懐があり、一体感や安心感がある。

「もっと賑やかな祭りにしたい」地元に住む木下さんは言う。「孫が大人になる頃も楽しく祭りが出来るように、いろいろな人が祭りに来てくれるようになってほしい」と。

日が落ちた頃、花火の打ち上げが始まった。水面を這うように動く金魚花火や打ち上げ花火などが行われ、いよいよ祭りは最高潮となった。

「いい祭りだろ」

先ほどの言葉が心に響いた。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

いい祭りだろ。
にぎ
もっと賑やかにできたらいいよね

てんりゅう暮らしの見本帖

「神秘の池・新宮池で夏祭りを楽しむ人」



住民の手で守る飲み水

私たちが生きて行く上で欠かすことができない「水」。現在では、多くの地域で上水道が整備されており、蛇口をひねれば簡単に出てくるもののように思われがちだ。しかし、急峻な山あいにある龍山町では、大規模な水道設備の設置が困難なため、住民たちによって組織された組合によって管理される小規模な飲料水供給施設がいくつかある。

今回、取材したのは、寺尾・中村北飲料水供給施設の管理を中心的に行っている中澤さん。中澤さんの住む集落は現在10戸、龍山町瀬尻の檀山から下った山の腹に位置する。

まず、中澤さんとともに私たちが向かったのは、水源となる沢のある場所だった。取材に訪れた11月は、水が豊富に流れ出ていたが、1年を通すとこういった場合はかなり少ないそうだ。

「特に冬場だね。毎年2月からの1カ月は、この水源が枯れてしまうことがほとんど」と中澤さんは言う。水が少ない時期には、予備水源から取水し、何とか必要な水を確保する。「水の量には限りがある。集落内のどこかの家が水を出しっぱなしにすると他の家に影響するから困っちゃう」と中澤さんは苦笑いした。

水源から各家庭までの間には、タンクが5カ所設置されている。これらの掃除や点検は、業者に委託しているが、年1回の大掃除は、集落に住む人たちの手に

よって行う。しかし、過疎化と高齢化により、近年こうした活動も厳しい状況だ。「今はだいたい6、7人で大掃除の作業をするんだけどね、68歳の人が一番の若手」と中澤さん。昭和47年に最初の施設が整備された頃は、水当番を作った代で水源やタンクを掃除してきたそうだが、現在は中澤さんが一人で掃除を担うことも。特に、台風など大雨の後には、水が濁ったり、砂利がたまったりと大変な作業になることが多い。

集落の暮らしを支える人

昭和47年以前のことを聞くと「竹を切らないで、沢や湧き水を各家庭に引き込んでいた」と教えてくれた。その名残で、中澤さんの家の周りには、今も竹のバイブがいくつか残されていた。中澤さんの住む寺尾地区は標高およそ450メートル。生活に必要な水を確保するため、先人たちがかなり苦労しただろうと推し量った。

中澤さんの家に戻ると、施設整備を行った当時の資料などを見せってもらうことができた。管理組合を設立した経緯や、水当番の日誌などもぎゅぎゅと残されている。特に興味深かったのは、水の通るルートやろ過器などの操作方法が細かく示された説明書だ。写真入りの説明書は、中澤さんがパソコンで自作したもの。おかげでどのように水が自宅まで供給されているか各家庭でも承知しているそう

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

だ。地域の歴史などの文献を個人的に整理しているという中澤さんならではの仕事といえ、ば簡単だが、誰にでもできることではない。この資料から、集落内で中澤さんが果たす役割の大きさをうかがい知ることができた。「大変になってきたけど、誰かがやらなきゃしょうがないもんね」と中澤さん。人のために自分の力を出し惜しまない生き方には、頭が下がる思いがした。

誰かの喜びは自分の喜び

地域内での中澤さんの役目は、水道施設の管理だけにとどまらない。手先が器用なこともあり、正月時期になると「しめ縄」づくりを一手に引き受ける。その数大小合わせておよそ100本。中澤さんは「父親がやっていたのを子どもの頃に隣で見ていたから、いつの間にかそれにならって自分もやるようになった」と、今に至る経緯を教えてくれた。

わらを一つつ手作業で丁寧にする作業から始めるため、11月に入ると手掛け始めるそうだが、これはすべてボランティア。しかもきちんと注文先がリスト化されている。注文先は町外にまで及ぶそうだ。「売るのはないんですか」と聞くと、にこにこするだけで、特にそういうつもりもないとのこと。しめ縄づくりに必要なわらははおよそ200束ということだが、これも中澤さんが個人で用意しているというから驚く。

この他にも、瀬尻地区の名物「ぶか風」の糸も、実は中澤さんの手によって作られているのだそう。250メートルにもなるという

大変になってきたけど、 やらなきゃしょうがないもんね。

てんりゅう暮らしの見本帖

「小規模飲料供給施設を管理する人」

う糸は、2カ月から3カ月をかけて麻をより上げて作る。1日の作業時間は、およそ12時間というからこれまた驚きだが、その苦勞を中澤さんは感じさせない。自分の役目をただ果たしているだけといった表情で「風が大空に揚がっていくのが、毎年の楽しみだよ」と話してくれた。

今は、この他にも地域内の屋号や空き家など調べてまとめているという中澤さん。昔のことを知っている人がいるうちにやっておきたいと話してくれた。話を聞けば聞くほど、その「まめさ」にただただ感心させられるが、中澤さんは「奉仕といえは奉仕、遊びといえは遊び」と笑うだけ。その飾らない人柄も含め、魅力的な人だと感じた。

中澤さんの家からは、正面に竜頭山、眼下に天竜川という絶景を見ることができ。こうしたロケーションで毎日暮らしてきたことが、中澤さんのおおらかな人柄に少なからず影響しているのだろうか、話しを聞きながら、ふと思った。それほど素晴らしい風景だった。

庭先ではヤマガラが羽を休めていた。私たちと同じように天竜川と対岸の山々を眺め見てから、しばらくすると気持ち良さそうに飛び立って行った。鳥にだってここから見る景色の素晴らしさが分かるのかもしれない。いや、もしかすると、中澤さんの温かい人柄に魅せられて、ここに立ち寄るのかもしれないな、と思うと何だか妙に納得した気持ちになった。



伝統の舞と水

天竜区には、数百年の歴史を持つ伝統芸能が数多く残されている。これは、昔から東西を結ぶ交通の要衝として、人や物の交流が盛んに行われてきた土地柄から生まれたものとされる。県指定無形民俗文化財である「川合花の舞」は、天竜区を代表する伝統芸能の一つだ。

佐久間町川合地区に伝わる川合花の舞は、奥三河の花祭りに由来するとされる湯立神楽。同地区の八坂神社で行われる祭りは、神社境内で舞処まいどの中央に置いた湯釜の周りで一昼夜舞が奉納される。今回、この地を訪ねることにした理由はこの湯釜の中にある。釜の中で沸く水は「浜水」と呼ばれ、これを汲み取る浜水汲みという神事から祭りが始まるというのだ。400年以上もの歴史を持つ伝統芸能にも、やはり「水」。天竜区らしいと感じた。

10月25日、午後2時。川合地区の会場近くに到着。たまたま出会った人に駐車できる場所を聞こうと声をかけると、この男性の家の前に停めてもよいと許可をもらった。見ず知らずの自分に対して、とても親切。図らずも田舎ならではの優しい人柄にふれることとなった。祭りが行われる八坂神社に着くと、境内には、舞処（舞を行う場所）と呼ばれる二間四方の空間が作られ、祭りの準備はほぼ整っていた。会場には、地元の人よりも、こうした伝統芸能を訪ね歩いて

いるという人たちの姿が多く目立つ。熱心な人は、浜水汲みを見たいと早くから会場に足を運んだようである。

その中の一人、三遠南信地方の民俗学を研究しているという男性は「浜水、つまり海水（塩水）で身を清め、無病息災を願うという習わしでしょう」と浜水の意味を解説してくれた。「一つひとつのことに意味がある。ぜひそれを感じてほしいですね」と続けた。

海にはほど遠い山あいの集落、川合地区。浜水という言葉が使われるのにはこうした意味がある。かつて、浜水汲みは、遠州灘につながる天竜川まで水を取りに行っていたこともあったそうだ。時代とともに、少しずつ形を変えながらも伝統は確かに守られ続けている。

午後3時。浜水汲みを行うため、1つの木桶を男性2人が持ち、神社近くに湧き出た水を汲みに向う。男性2人は神妙な面持ちで肅々と水を汲み、これを八坂神社まで持ち帰る。境内は神聖な祭りの幕開けに相応しい雰囲気包まれた。

祭りで地域が一つになる

日が暮れる頃になると、境内のあちこちで火が焚かれ始めた。先ほどの浜水は舞処の中央の釜の中でぐらぐらと煮え立っている。舞処では、この場を清める「地固め」に始まり、最後の「湯上げ」まで20もの演目が行われる。舞は笛、太鼓、歌謡うたがらに合わせて五方（東西南北と中央）

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

に舞子が舞う。舞子を務めるのは子どもから大人まで、地元のさまざまな年代の人たちだ。中には、この祭りのために遠方から帰省したという若者もいた。

「毎年10月に入ると子どもたちの練習が始まるんですよ」と話してくれたのは、浜水汲みを行った一人、榎松さん。「今年は、初舞になる幼稚園児が3人。心配ですね」と自分のこと以上に心配な様子だ。人が大勢いた時代には、小学生になって初めて、舞子として参加できたそうだ。「やりたくても、やらせてもらえず、順番待ちだった頃もあったのにね」と当時を振り返る。

榎松さんは舞処で繰り広げられる舞に目をやりながら、話を続けてくれた。その起源は鎌倉時代まで遡るとされる歴史ある祭りをどのようにして残していくか。これは川合地区の大きな課題なのだ。

川合花の舞保存会の会長を務める嶋田さんと同じことを懸念する。「最近では、近隣の地区の人たちも舞を舞ったり、笛を吹いたりしてくれ。昔は男性だけが舞に携わっていたんですが、そんなこともいつかはいられない。今は、女の子もみんな参加しています」と現状を語ってくれた。そして「口伝で継承していくから、時代と共に変わっていく部分もあると思うんです。でもね、例えやり方が少しずつ変わっても、地域で祭りを守り続けていくんだという気持ちは変えられないですよ」と続けた。

次の世代は確かに育っている

現在70世帯ほどの川合地区。この日、取材を

変わることもあるし、 変えられないこともある。

てんりゅう暮らしの見本帖

「伝統の舞を受け継ぐ人たち」

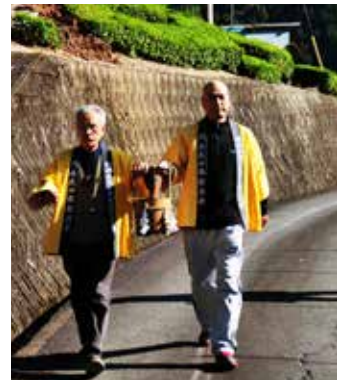
する中で10年後、20年後を心配する声が多く聞かれたのも事実だ。

しかし、一方で頼もしい言葉も聞くことができた。この日も舞を見事に奉納した中学生たちからだ。幼稚園の頃から参加しているという彼らにこのまちの伝統の舞について聞くと「自分たちのふるさとに、自慢できるものがあるのがうれしい」と間髪入れずに返ってきた。「花の舞の歴史は川合の誇り。ずっと続けたい」とも。その言葉を聞いて胸が熱くなった。

先ほど榎松さんが心配していた初舞の3人は、花の舞の名の由来ともいわれる花笠をかぶって舞処に登場した。舞を指導してきた地元の人々たちはもちろん、多くのカメラマンたちや見物客たちもその可愛らしい姿に温かい眼差しを送る。そして、30分を超える舞を踊り切った子どもたちには大きな拍手。会場は温かな雰囲気と一体感に包まれた。

4歳の子どもたちにとって、この日の出来事がどんな思い出になるのかは分からない。しかし、これまで数百年にわたって受け継がれてきた舞が、川合地区の一員として、彼らの小さな肩に掛けられた目になったと信じたい。

最後に、取材中に聞いた川合地区の集会所について紹介する。数年前に立て替えた際、舞の練習ができるようにと、わざわざ土間が広い設計にしたそう。日常生活に伝統文化が根付いていることを示す好例だ。何事も一つひとつに意味がある。改めてそう感じる話だった。



とっておきの場所「空き家」

人口が減少する中「空き家」の問題は、日本全体が抱える課題としてクローズアップされることも多くなっている。天竜区においてもまた、この問題は例外ではない。住み手を失った家屋の処分や活用、住民たちは日々頭を悩ませている。

今回、水ともにもある天竜区の暮らしを取材する中で「沢の近くの空き家で涼んでいるおばあちゃんがいるから、訪ねてみては」との情報提供があった。「沢」「空き家」「おばあちゃん」。少ない情報の中に、天竜区ならではの暮らしにつながるキーワードが並んでいるように感じた。直感的に面白い取材になるのでは、という期待が膨らむ。いずれにせよ、どんな取材になるかは行ってみてからの話だ。8月下旬、そんな期待を胸に、龍山町大嶺おおみねのある集落を訪ねた。

お盆を過ぎたとはいえ、まだまだ残暑が厳しい。天竜区の夏は、全国レベルの暑さだ。空き家で涼んでいるというおばあちゃん2人と待ち合わせた午前10時。この日も朝から30度を超えて、セミは親の敵のように鳴き続けている。

「何だか知らんが、私らに話なんか聞いても大した話はでせんよ」といいながら笑顔で迎えてくれたのは、力子さん(90歳)とスズ子さん(83歳)。失礼ながら、年齢を聞いて驚いた。ずっと若々しくて可愛らしい2人だった。「どうぞどうぞ」

と案内された家は、古くから酒屋を営んでいた建物だという。「借り始めるまでは、中がカビだらけだったけどね。2人できれいに掃除したですよ」とスズ子さんは言った。

空き家と聞いていただけだったので、正直にいうとポロポロの家を想像していたのだが、家の中に入って驚いた。長い年月を経ているが、梁や柱は風格があり、広い土間もある。もともと商売をしていたという名残りもある立派な家だった。「明治頃の建物じゃないかな、100年はゆうに経ってるね」と2人は言った。「材料がいいんだろうね。木そのものが」と力子さん。「こは、いい木には事欠かないところだ」と説明してくれた。土間に置かれたソファに2人が仲良く腰を下ろす。いつもの暮らしのいつもの光景なのだろう。

自然がもたらす涼

この家の裏側には、白倉川が流れている。開放された戸からは、涼しい風とともに、ザーザーという川の音が聞こえてくる。「この集落は川が隣にあるから、夜も寝苦しいほど暑くない。窓を開けておけば沢から涼しい風が来るもんで、水の上に寝ているようなもんだわ」と力子さんは笑った。隣でスズ子さんもうなずく。何ともエコな暮らしぶりである。しばらくして、スズ子さんが思い出したように立ち上がり、天井に下がっ

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

たサーキュレーターも回してくれた。「これでもっと涼くなるかね。ファンがカタカタと音を立てて回り始めると、この空間にレトロな雰囲気さらに漂い始めた。

2人がこの空き家を借りるようになったのは5年ほど前から。川に近いこの空き家は、風通しがよくて涼しいと、夏場だけ借りることにした。2人は毎日、このソファに座って昔話に花を咲かせたり、編み物をしたりして過ごす。「私らのいい遊び場だよ」と力子さん。「カラオケの機械もあるし、冷蔵庫には冷たいものが入ってる」と2人の隠れ家の魅力を笑顔で教えてくれた。

いつもの毎日、いつもの幸せ

2人の日常はとても規則正しい。毎日のスタートは、朝7時30分の体操から。近所の人5、6人が集まって行っているのだそっだ。「毎日のことだから、誰かが来ないと心配になる。1軒の家みたくないからね」とスズ子さん。現在一人暮らしの力子さんは「みんなで食べるものも持ち寄りたりね。そのおかげで今の暮らしができて」と感謝の気持ちを語ってくれた。

ラジオ体操が終わると、朝の連続ドラマを見て、8時30分からは散歩。家に帰って、家事や昼食を済ませて、午後1時30分頃に空き家に向かう。ここにいるのは、3時30分までのおおむね2時間。一日で一番暑い時間、この場所で涼をとるといわけだ。

空き家の前を通る人は、ここでひと休みしていくことも多い。時には野菜などを置いて

沢から涼しい風が来るもんで、 水の上に寝ているようなもんだわ。

てんりゅう暮らしの見本帖

「川端の家で涼む人たち」

いつてくれる人も。「みんな、ここは涼しくていいねって言うよ」と2人。「本当にこないところ、なかなかないだかもね」と顔を見合せて笑った。

昭和30年代、龍山町は秋葉ダム建設により、多くの工事関係者とその家族たちで賑わっていた。「あの頃は、立ち飲み屋があつて、そこら中でけんかが絶えず、夜もおちおち眠れなかった」と当時を懐かしむ力子さん。「今じゃあ、考えられないと思うけど、私はその頃、映画館をやっていたんだよ」と続けた。かつての60軒ほどの家があつたというこの集落も、現在、3軒を残すのみ。必然的に空き家が多く残されることになった。

しかし、まちの活気こそ陰をひそめた現在だが、2人は「今はとても幸せな時代だ」という。「戦争もないし、食べるものにも困らない。一人で寂しい思いをすることもないし、ここにくれば仲間がいる」。力子さんとスズ子さんは、穏やかな表情でそういった。「できれば、1日でも長くここで元気に暮らしたい」。それが今の2人の共通の願いだ。

「幸せとは何か」という答え探しは人生の永遠のテーマだ。2人の笑顔にその答えのヒントがあるように思う。特別ではない、変わらない日常こそが幸せ。多くを語らずとも、そんなことを感じさせてくれる魅力的なおばあちゃんたち。2人がくれた笑顔に心から感謝したい。



夫婦二人三脚でこんにゃく作り

水窪のこんにゃくは、こんにゃく芋の占める割合が高く、色が濃い。「昔からのものが好まれるんだ」水をたくさん入れると味が薄くなってしまおうと教えてくれた米山さん。水窪の郷土食、特産品でもあるが、ここの手作りこんにゃくは、歯ごたえや舌触りが市販のものとは一味違う。主に町内へ卸しているが、地元の人は、ここのしか知らないというほどだ。

米山さんは2代目になり、店の創業は40年ほどになる。奥さんと、今は二人でこんにゃくを作っている。佐久間から嫁いできて30年以上になるという奥さんは、子育てが終わってから手伝いを始めたそうだ。「この仕事は一人じゃできん」そう話す米山さんの横で、奥さんは糸こんにゃくをくるくると巻き取り始めた。だいたい作業は午後から始めて夕方で終わらせる。

こんにゃく作り 今、昔

10月はこんにゃく芋の収穫時期だ。以前は、倉庫いっぱいになるぐらい水窪産の芋が採れ、それを使っていた。しかし、今では、大部分が、群馬や栃木から仕入れた芋になってしまった。水窪では、こんにゃく芋の生産者は減っていて、地元の芋があまり使えないんだということを、米山さんは残念そうに話した。

こんにゃく作りには大量の水が必要だが、米山さんのお宅では、地下20メートルほどから湧き出る地下水を利用している。そこは昔から変わっていないところ。芋を洗って、ゆでて、つぶすと、それ以降にも何段階もの工程を踏

んで、こんにゃくは出来上がる。また、この地下水は調理するだけでなく、終わった後に、こんにゃく芋の成分でぬるぬるになってしまった床や機具類を洗い、清掃することにも使われている。

ふるさとを思い出す味

「涼しくなってくるとお客さんが増えるよ」寒い季節といえば、おでんを思い浮かべるが、やはり冬場が一番忙しいそうだ。板こんにゃくは煮しめに、丸こんにゃくはちぎって辛めの味付け、糸こんにゃくは鍋に。刺身こんにゃくは、もちろん火を通さずそのまま、醤油などをつけて。さまざまに成形されるこんにゃくは、調理方法も食感もバリエーションに富んでいる。幾分太めの糸こんにゃくを使ってくるみえは、水窪の冠婚葬祭に欠かせない料理だという。故郷を離れた人にとっては、懐かしい味。帰省したら食べたくなるという人もいる。

「立ち仕事はつらいけど・・・」と、手を動かしながら奥さんは話すが、市内外の物産展に出店するのは楽しいのよ、とはちきれんばかりの笑顔。てきぱき動く姿と明るい話しぶりは、とつとつと話す米山さんとは対照的なものだが、それが夫婦のほどよいバランスになっているのだろう。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

この仕事は一人じゃできん。

てんりゅう暮らしの見本帖

「二人三脚でこんにゃく作りをする夫婦」



標高450メートルの風揚げ

この集落の風揚げは、ひと味違うらしい。何が違うかを確かめなければ、その地を訪れてみるのが一番手っ取り早い。百聞は一見に如かず、というやつだ。そんなわけで「ぶか風」と呼ばれるその風を見るため、6月初旬、天竜区龍山町瀨尻の寺尾地区に向かった。

国道152号沿いの瀨尻の通りを抜けたところで左折し、急峻な山の中を車で走ることしばらく。一気に視界が開けた場所に差しかかる。そこには風揚げ会場を示すのぼり旗。一見すると、風揚げに向いた場所のように思えない。まして、寺尾は標高450メートルの山の中にある。風揚げには、当然のことながら風が必要なだろうが、その風は、どこからやってくるのかも、どんな方法で風を揚げるのかも想像がつかない。

そんなことを一人思いながら、せっせと先ほどから風を組み立てている男性にひとまず声をかけてみることにした。

風を読む

男性は宮澤さんといった。この行事を主催する保存会の代表だった。「今日はどうだろうね、雨は大丈夫そうかな」。宮澤さんは空を眺めながらいった。先日の天気予報は、この地域も梅雨入りした模様だと伝えていた。

「毎年6月第1日曜日にやることになっているんだけどね。今年は鮎の解禁日と重なったから、2週目にしてやったんだ。そうしたら今度は入梅。難しいもんだな」そう言って笑った。瀨尻のぶか風揚げは、初節句を祝う伝統行事だ。5月の節句というのはよく聞くが6月というのは珍しい。これは「5月は茶摘み」というこの地域の事情があるのだそうだ。こうした事情から、年によつては雨の心配をしなければならぬ時も少なくはない。

しばらくすると宮澤さんは、眼下の天竜川の方を見ながら「そろそろいい風が吹きそうだ」と言った。確かに、先ほどよりも道沿いに取り付けられたのぼり旗も静かにはためきはじめている。周囲の木々もワサワサと揺れだした。

「ここは、南北に流れる天竜川がぶつかった山の上にある。だから、山の斜面を吹き上る南風で風を揚げるんだ。川がだんだん水面が白く波立って来るのを朝から待つ。川が鏡のように周りの景色が映り込むようじゃ、大風が揚がるような風は吹かない」と宮澤さんは教えてくれた。誰が始めに言い出したことかは分からないが、昔から風揚げの時には、天竜川の変化で風の動きを読むのだといわれてきたという。これが寺尾での風揚げの常識だ。

願いは大空に舞う

年配の人に聞くと、大昔は家々で風を

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

揚げ、百もの風が大空を埋め尽くしたこともあったのだそうだ。その光景は、想像するだけでも心が躍る。昭和30年代に一度途絶えたという行事が復活したのは、平成になる少し前。子どもの頃に揚げた風をもう一度見たい、という思いを人々は持ち続けていたのだろう。また、瀨尻に住む人はもちろん、出身者も含めて、年に一度地元が集まる機会にしたいという思いも、ぶか風復活の大きな理由となったそうだ。

その後、保存会の手で風は毎年揚げられ続けてきた。今では、ここに住む人たちこそ少なくなくなったが、毎年このために、東京などからも里帰りする若い家族も多い。そして、みんなで力を合わせて風を揚げる。今年もまた、たくさんの人たちが集まって、次々に風が大空に放たれた。人々の願いは一つ。子どもたちの健やかなる成長だ。

瀨尻のぶか風は、およそ20畳ともいわれる大きさや「ブーン、ブーン」とうなる音が特長とされる。しかし、何といても最大の面白さは、風を揚げる人たちと眼下を流れる天竜川との見えない対話にある。その日も午後3時頃になると、川は穏やかになりはじめ、川面に青々とした龍山の山々が映り込むようになってきた。

宮澤さんは「今日は、もう風は吹かないだろうな。そろそろこの辺で終わりだ」と言った。それは、あたかも天竜川がそういうんじや仕方がないという顔だった。その後、大空を悠然と泳いで風は、ゆっくりと糸に引かれ、人々の手に戻っていった。

天竜川が鏡のようじゃ、 風は揚がらない。

てんりゅう暮らしの見本帖

「山の上で大風を揚げる人たち」



まる 70 年

「今年、83歳。14歳から始めたから来年で、まる70年になるね」
そう笑顔でお話してくれたのは、
今では静岡県内では2か所のみという鍛冶屋^{かじ}を営む、片桐さん。
「30代で親父が倒れてね、そこからは一人で・・・二代目になるね」
懐かしそうに昔を思い出しながら、語ってくれました。
ここは静かな山あいの街並み、天竜川の中流に位置する佐久間町^{にしと}西渡地区。
今日も「カンチンコンチン」と、
片桐さんの叩くハンマーの軽快なリズムが山々に響き渡ります。
真っ赤に焼けた鉄を水に浸けた片桐さん。
じゅわーという音とともに、白い湯気が上がりました。

全国から注目が

今では珍しい鍛冶屋さん。テレビ局などからの取材が絶えません。
使い慣れた道具が並ぶ作業場で工程を何日間かにわけ、包丁、鉋、
下刈り鎌などを作ります。
「1年間で、だいたい1000丁ぐらいになるのかな」
今まで、作り上げた品物は数えきれません。
「テレビを見たって行ってね、電話をくれるだよ。今も忙しくて・・・」
そう語りながらも、何だかうれしそうです。

目標、まずは90歳まで現役

「今は、朝5時くらいに起きて、7時半くらいから夕方まで働くかな。
少しは休めって言われて日曜は休むようにしたよ」
まだまだ、現役です。
平成元年にイベントへの出展を勧められ、今ではご自分から出展の
申し込みするほどに。
秋のイベントシーズンは大忙しです。
お話を伺っている最中にもお客さんが。
「90歳までは働きたいよ」
90歳とは言わず、もっともっと続けてください。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

少しは休めって言われてね。
でも、90歳までは働きたいよ。

てんりゅう暮らしの見本帖
かじ
「鍛冶屋を営む人」



天竜区の水（天竜）

鹿島八幡神社の湧き水



コミュニティを紡ぎ出す水

7月初旬の日曜日、早朝から天竜区^{かじま}鹿島にある八幡神社の境内には、ブラシや竹ぼうきを片手に住民たちが集まり始めた。その数およそ20人。今日は、月に1度の池の掃除の日だという。八幡神社は、遠州鉄道西鹿島駅から北西におよそ300メートル、国道152号沿いにある。

社殿脇の大木のクスノキの根元から水が湧き出している八幡神社の水。かの徳川家康公が、武田軍との戦いで浜松城へ落ち延びる際に立ち寄り、手拭いにその水を浸し、汗ばんだ体を拭いて休んだとも伝えられている。当時、この地は「涼の御所」といわれ、今も地名としてその名を残すに至っている。

作業をしている人たちに声をかけると「この湧き水のことなら、長老に聞くといい」と青柳さんという男性を紹介された。神社の目の前に住むという青柳さんは、現在81歳。この場所の湧き水を生まれた頃から見続けてきたという生き字引だ。

「昭和30年頃まではね、生活水としてみんなが使用していたんだよ」と青柳さんは、持っていたほうきの手を休めて教えてくれた。どこの家でも水道が引かれるようになった今でこそ、生活のために使われることは、ほぼなくなったというが、それまでは20軒ほどの家庭の生活用水だった。「その頃の名残で、有志が当番で掃除をしているんだよ。大きな掃除が月に1回。簡単な掃除は、女

の人たちが3日に1回くらいでやっていてね」

この話からも、この水が地元の人たちに必要不可欠な水源として、昔から大切にされてきたことが伝わってくる。「今じゃ、近所の人たちと顔を合わせる機会も減ったでしょう。ここの人たちは、この掃除があるからね。こうして定期的に寄り合ういいきっかけになっているんだよ」と青柳さんは笑顔で言った。

昔の名残を感じさせるものといえば、湧き水が升目状に区切られている点も面白い。水源に近い方から「飲み水」→「米洗い」→「洗濯場」→「野菜洗い」の順に使うことが決まっていたのだとか。「子どもの頃は、大事な飲み水だったから、やたらにこの辺で遊ぶと怒られたもんだよ」と青柳さんは懐かしそうに笑った。「夏には、どこかの家のスイカが冷やしてあった。でも、誰かが盗んでいくようなこともない。いい時代だったね」。

近くで作業していた別の人に話を聞くと「まだまだ、今でも使えると思うよ。災害でもあれば役に立つ時があるかもしれないね」と答えが返ってきた。これだけ念入りに手入れしているのだから、その言葉もうなずける。この地区の家々には、だいたい掃除用のデッキブラシか、ほうきがあるというのも面白い。

黙々と作業を続ける大人たちの脇では、4～5人で遊ぶ小学生たち。池の側には、子どもが遊ぶのに丁度いい湿地がある。しばらくすると「沢ガニがいた!」と弾んだ声も聞こえてきた。住民それぞれの時代の思い出とともに、八幡神社の湧き水はあるのだ。

天竜区の水（天竜）

西来院 いぼ観音の水



不思議ないわれのある水

天竜区西藤平にしふじだいらにある西来院せいらいいん。本堂の向かって左側の石段を下っていったところに小さく構えられた社がある。その横の岩から水が湧き出しおり、くぼみには水が溜められていた。この水は「疣いぼにつけると、その疣がたちまち消えてなくなってしまう」といわれている「いぼ観音の水」なのである。

その由来としてこんな話が伝わっている。

昔々、阿多古の里「くら沢」のほとりに木こりの夫婦が住んでいた。二人には三代という美しい娘があった。三代はよく働き、貧しい暮らしにも、何一つ文句を言うことはなかった。しかし、三代には、一つだけ悩みがあった。その美しい顔形には不釣り合いな見苦しい疣が、手といわず足といわずできていたからである。

ある夏の日のこと、三代が留守番をしていると誰やら家を訪ねてきた。「ごめんください。のどが渇いてとんと困り入った。水を一杯くださらぬか」見れば身なりはみすぼらしいが品のいい旅の坊さんであった。三代が裏の沢から冷たい水を汲み、差し出すと坊さんはたいそうな喜びようであった。そして坊さんは「ところでお娘ご、疣でお困りのようだな」と言い、三代の顔をじっと見つめた。「わしがいい薬を教えて進ぜよう。この裏山の岩場にある

小さな観音堂をご存じかな。その岩場に建つ観音堂のすぐそばに清水の湧き出ている岩穴がある。その水を疣につけなされ。疣はきっと取れますぞ」坊さんはそう言って立ち去って行った。

次の日、三代は、両親と一緒に裏山へ登り、疣取りの水を見つけた。三代は喜び、その水を持ち帰って神棚にそなえ、毎日疣につけた。すると不思議なことにひどかった疣が跡形もなく消えていったのである。「いぼ観音様、ありがとうございました。このご恩は一生忘れません」三代は手を合わせて心よりお祈りした。

——これが、この水がいぼとり観音の水と呼ばれる所以ゆえんである。この水の力にあやかろうと県外からも水をいただく人が絶えないそう。また、例年2月11日に大祭が行われ大勢の参拝者でにぎわう。



天竜区の水（天竜）

天白井戸



こんこんと湧き出る井戸水が生活を支える

井戸は、夕暮れの黄金色の光を反射させながら3段の柵を乗り越えて流れていた。洗い場には、長年使いこまれたと思われる洗濯板と掃除道具が置かれていた。

この天白井戸を説明してくれたのは、近所に住む内山さん。白髪の後ろ髪をちょいとまとめた、おしゃれなおじいちゃんである。以前は、電気工として働き、今でも自分の仕事が、発電所関係で残っていると話してくれた。この井戸の名前の由来を聞くと「すぐそこに天白神社があったからみんなそう呼んだんだ。名前なんてそんなもんだ」と軽やかに話した。

とてもきれいに整備されたこの井戸は、電源関係の宿舎が近くにあったことから、昭和30年頃に、その社員が作ってくれたもの。今は使われていないが、以前は井戸の水をポンプで汲み上げ近所のみんで使っていたという。

「今でも、祭りの時は、この井戸に飲み物やスイカを冷やしてみんなに振る舞うんだ」と、にこやかに話してくれた。手を入れてみると確かに冷たいが驚くほどではない。どちらかという心地よいさわやかさのある温度であった。

この井戸は、3段の水を溜める構造になっていて、一番上は食べ物を洗い、2段目が食器の洗い上げ、3段目は土のついた野菜を洗ったり、洗濯したりするのに使っていたという。それぞれの

境に木板を入れるための溝が作られている。「汚くなると木板を外せば勝手にきれいになる。水量があるからすぐに溜まるよ。でも、使うのは女衆で俺は詳しい時間は分らんが」と話してくれた。

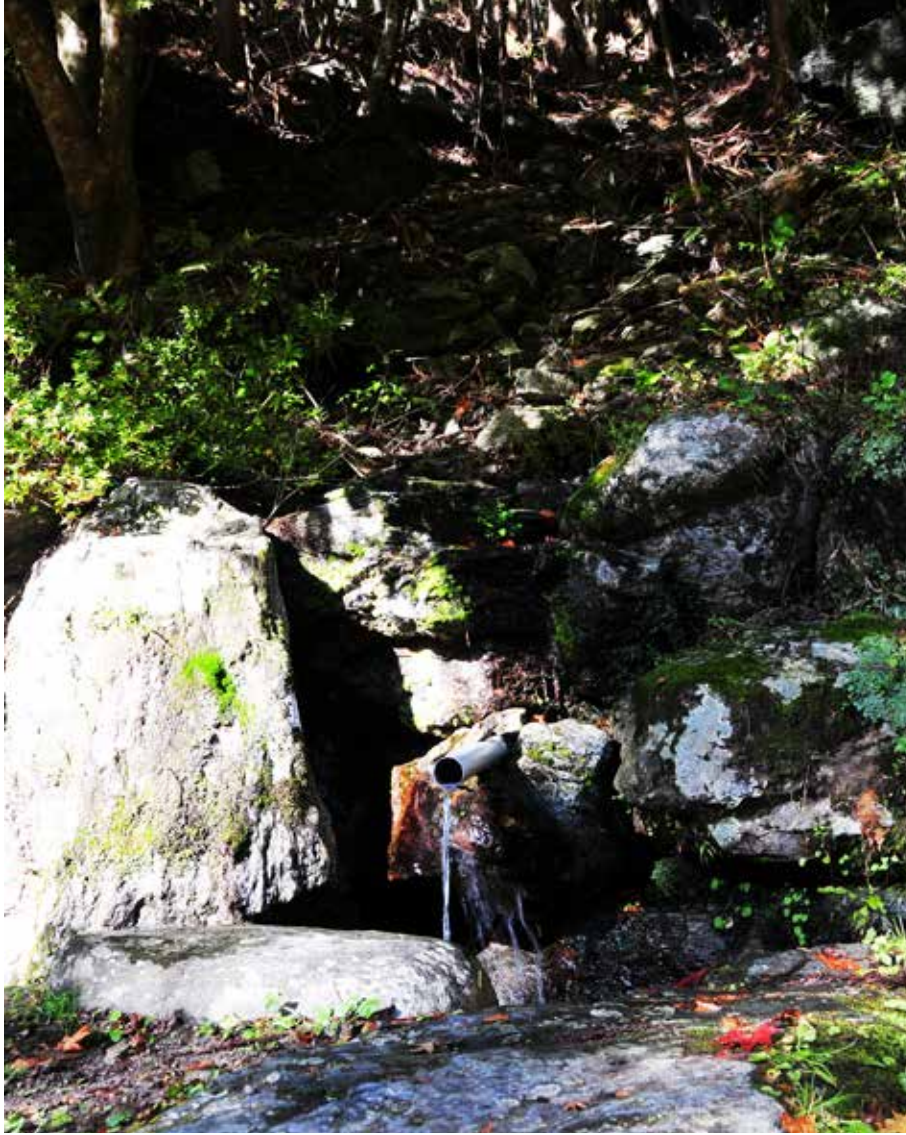
3段目の境に他とは明らかに違う突起が付けられている。「これに洗濯板をひっかけて洗濯してたんだ」と教えてくれた。きっと昔は近所の女性が集まって、文字通り「井戸端会議」をしていたのではなからうか。当時のにぎやかな様子が目に浮かぶ。

夜使う人のためにつけていた電灯の電気も今は止めてしまったという。掃除の当番制も今はない。しかし、水自体はまだ現役の湧き水であるという。断水した時には、この水を沸かして飲んだこともあるそうだ。水は地下深くから湧き出ているから、大雨などで濁るということもない。また、夏に枯れるということもない。「水が出なくなったらしょうがないが、出続けているから使うし、出続けている限りは世話しにゃならん」と内山さん。今ではほとんど使う人はいないという天白井戸だが、ほうきやり取りが置かれ気が付いた人が掃除をするそうである。水を大切に思う気持ちからか、湧き出る水の近くに小さな社がまつられ、近所の人から大切にされていることを感じさせた。

人々の生活を支えてきた天白井戸。時代の移り変わりとともに、この井戸を取り巻く環境も変わってきたことだろう。しかし、ひっそりとした佇まいのこの井戸の水は、時代の流れなど我関せずといった様子で流れ続けている。

天竜区の水（龍山）

白倉の長寿の水



一年中枯れることのない水

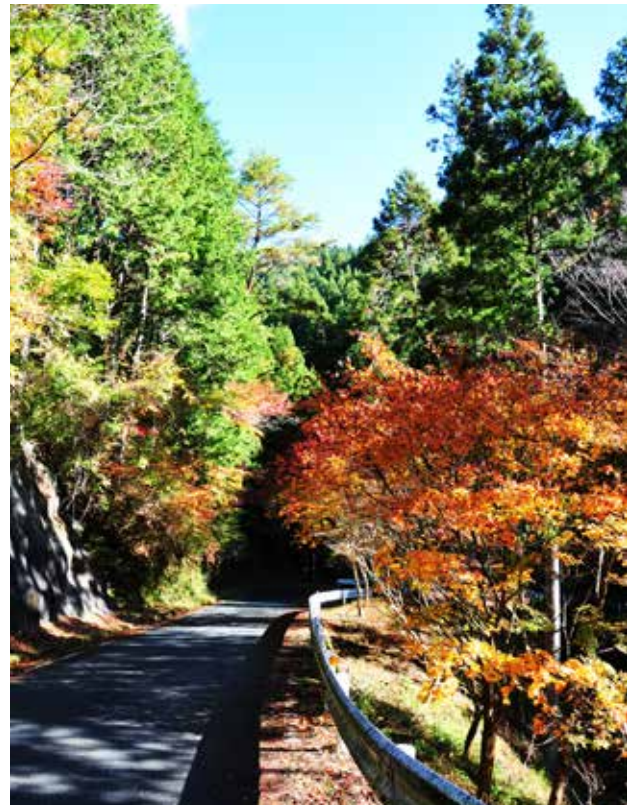
天竜区の紅葉の名所として知られる白倉峠を過ぎた場所にある「長寿の水」。昔から地元の人たちが大切に守り続けてきた水は、その名のとおり「長寿」にご利益があるとされてきたものだ。その真偽のほどはさておき、その名前には、誰しも興味を引かれるのではないだろうか。

湧き水は、標高 1,027 メートル、山頂には一等三角点がある白倉山の麓、清流白倉川の源流部から湧き出ている。湧き水の脇には、石碑が建てられ「飲んでください長寿の水、飲めば心に花が咲く」との文字。こんこんと湧き出る水は冷たく、年中枯れることがないという。休日には、水くみのために立ち寄る人の姿を見ることもある。

この地を訪れた11月中旬は、白倉峠の紅葉がまさに見頃の時期。その道中では、紅や黄色に色づいた紅葉や楓を見ることができた。毎年、白倉地区では住民の皆さんによる「白倉峠もみじ祭り」が開催され、多くの人でにぎわう。白倉峠の魅力は、大小様々な滝と合わせて、紅葉狩りを楽しむことができること。整備された遊歩道を歩きながら、気に入ったロケーションをバックに記念撮影をしている人たちも多い。中でも、二段構えに滝が流れる金山かなやまの滝は、白倉峠の人気スポットだ。

また、白倉峠もみじ祭りでは、特製の五平餅や里芋の串焼きなど、

この地ならではの秋の味覚も楽しむことができる。長寿の水を訪ねるならば、ぜひ、このもみじ祭りの期間に合わせて行くことをおすすめしたい。



天竜区の水（龍山）

瀬尻不動の滝



天竜区を代表する名瀑^{めいばく}

龍山町瀬尻^{せじり}の段々茶園の上部に位置する「瀬尻不動の滝」は、急峻な山あいの中を伝う不動沢の途中にある。不動沢は、かなりの急斜面を流れているため、沢全体が一つの巨大な滝ともいえるような景観を生み出している。

不動沢に架かる不動橋横から不動の滝沿いには、滝壺までおよそ100メートルの遊歩道が整備されている。新緑や紅葉など、季節ごとに移り変わる風景が魅力の遊歩道。下り終えると終点には四阿^{あずまや}があり、ここから落差32メートルの瀑布^{ぼくふ}を見ることができる。また、不動橋付近は、天竜川や天竜美林を一望できるビュースポットとしても知られている。

不動の滝に向かう際、幾度も目にする「瀬尻ぶか凧揚げ」の看板。標高450メートルに位置する瀬尻寺尾地区では、毎年6月初旬に初子を祝う「ぶか凧揚げ」が行われる。天竜川から吹き上がる風を利用して揚げられる凧は、大きいもので10帖ほど。また、この地区から下りた国道152号沿いには、地域のお母さんたちが運営する地場産品の加工場兼販売所があり、人気を集めている。瀬尻を訪れた際にはぜひこちらにもお立ち寄りいただきたい。



天竜区の水（佐久間） 歩危の湧き水



四季の風景を楽しみながら

「気持ちいいんだよね。この湧き水にはいつも世話になってるよ」
声を掛けると、ランニングの途中中だそうだ。たしかに、気持ちよ
さそうである。

国道473号に沿って、佐久間協働センターから浦川方面に車で
およそ3分。水車の模型が目印となる歩危の湧き水。ここは佐久
間ダムに向かう交差点に位置し、近くには、天竜消防署佐久間出
張所や中部大橋（通称；B型鉄橋）がある。

「歩危」とは、その字が示す通り、歩くと危険との意味があり、
その昔、絶壁の山からの落石が危険であることからこう呼んだと
いわれている。しかし、現在は、落石防止柵も設置されており、
安心して通行できるのでご安心を。

ここは、地元のお母さんたちが、いつも季節の花を植栽して私
たちを迎えてくれる。春は桜とチューリップの共演、夏から秋に
かけてはサルビアの大行列、冬には葉ボタンやパンジーの行進と、
四季を問わず道行く人たちの目を楽しませる。水車と花、鉄橋、
そして湧き水…このコラボレーションには、カメラなしではいら
れない。



天竜区の水（佐久間） 銀冷水



その名のとおり冷たく光る

地元の人に聞いても「特にいわれは聞かないね」と返ってくる銀冷水。誰が名付けたかも分からないこの銀冷水は、その名のごとく、銀色に輝き、そして冷たい。

ここはJR飯田線出馬駅から、愛知県方面へ車でおよそ10分。県道沿いにあり、駐車スペースもあることから、ドライブの休憩場所として利用されている。

周囲の杉木立の景観と、相川の清流、そして銀冷水。ドライバーの疲れも癒されること間違いない。

気分よく運転していると、思わず通り過ぎてしまいそうな銀冷水。ぜひ、立ち寄って癒されたい。なお、現地までの行程はカーブも多く、トラックも多いので運転には注意が必要。

ところで、前出のJR飯田線「出馬」駅。何と読むのだろうか。正解は「いづんま、駅。ホームへ降り立つと、小鳥のさえずりをBGMにのどかな山村の風景が広がる。足を延ばすと名水「おおしたたき大下滝」にもたどり着くことができる。



天竜区の水（佐久間） 龍頭の湧き水



りゅうとうざん 龍頭山から湧き出す水

国道152号、佐久間町の大井橋交差点から大井トンネルをくぐって、車で北へ向かうことおよそ5分。右側の大きな看板は、ドライバーの目を引き留める。

ここ、龍頭の湧き水は、文字通り、南アルプス最南端に位置する標高1,352メートルの龍頭山が水源となっている。森林に囲まれてこんこんと湧き出したこの水の発見は、奈良時代にまでさかのぼるといわれている。

そういえば、ここにたどり着く途中、大井トンネル北側にたかさんの車が駐車してあったことを思い出した。そこは龍頭山への登山道入り口。週末は多くの登山客でにぎわっている。登山客の一人に聞くと、「健康づくりにはちょうどいい山なんだよね、高さも勾配も。頂上からの眺めは最高だし、それから四季の移り変わりも楽しいしね」と返ってきた。

浜松市内外を問わず、多くの人たちに愛される龍頭山。これまで枯れることなく湧き出し流れるこの水は、登山客の足取り、息遣いを、昨日も今日も、そしてこれからも聞いていくことだろう。



天竜区の水（水窪）

足神社の湧き水



「命の水」だって言ってくれる人もいる

浜松市中心部から車を走らせ、2時間と少し。水窪地域でも長野県境に程近いところに足神社はある。「青崩峠を越え、この道（秋葉街道）を武田軍が通っていったんです」と、神主の守屋さん。神社の目の前は、古くから遠州と信州をつなぎ、多くの旅人が往来した秋葉街道だ。崖沿いで道幅も狭くて、こんなところ、馬や兵隊が通れるとは思ってなかった、と守屋さんは小学生のころ親に連れられて青崩峠を「べそ、をかきながら歩いた体験談を語りはじめた。

280年前の遠州大地震で、この辺りの地形が変わったということ、地質学者の先生から聞いたそうだ。それ以前の時代に、武田信玄が徳川家康と戦うために青崩峠を越えたときは、もっとなだらかだったらしい。そのことを知り、武田方の進軍をやっと納得できたんだ、と守屋さん。向こう側の峠は軍の兵糧を運んだから『兵越峠』だということも、教えてくれた。

余談はこれくらいにして、足神様の御神水のことを聞きたいと思っていたところ、「湧き水の前のあの石」と、次の話題へ。「牡蠣の化石なんだ。ここも今じゃあ、標高850メートルの場所だけど、2000万～3000万年前は海の中だったんだって」

地質学の奥深さを感じさせた。

足神様の御神水と呼ばれる湧き水。県外からも、年間1万人以上もがこの水を目当てに訪れる。定期的に水を汲みにくる人もいる。「1ヶ月ぐらい外洋に出る漁師さんは、船上での飲料用に大きなポリタンクで持って行く。まさに『命の水』だって言ってくれるよ」大量に汲んでいく人は他の人に迷惑にならないように、早朝に來たり、平日に來たり配慮してくれているようだ。

水脈等の調査をしてもらったことがあると、その結果を面白げに話してくれた。神社周辺の地下が大きなお椀型の岩盤できていて、熊伏岳^{くまふしだけ}などから流れ込む水を溜め込んでいるそうだ。近くを流れる川の水脈ではないのは不思議だねえ、と。

この周辺も三遠南信道の開通を目指し、環境も刻々と変わっている。「私はこの神社の41代目。先祖から受け継いできたこの地の環境保全や文化の継承もしていきたい。もちろん、足神様の御神水も見守っていきますよ」力強く、確かなものを感じさせる言葉だった。

天竜区の水（水窪）

山住の湧き水



うまいと言われて、うれしかったやぁ

二つの写真が並べられた。「水窪中心街の昔の写真があったから、比べられるように今の写真も撮ってもらったんだ」これをお客さんに見せたいんだと、杉山さんは納品されたばかりの写真の額縁を持った。水窪に来て40年以上経つという。それでも、まだ、よそ者だよと笑っていた。

以前、ペンションを運営していたことなどもあり、杉山さんのお宅には顔なじみの人たちが、“ついで”に寄っていくことが多いという。

ここ山住は、紅葉の名所である。10月半ば頃から、下見をするために訪れる人たちが徐々に増えてくるという。「この紅葉は、朝早い方がきれいなんだよ」山住の紅葉は、赤だけでなく緑や黄色、さまざまな色が入り、カメラマンにとっては絶好の被写体となる。「ゆっくり見たいんなら、1時間以上は早めに来たほうがいい」とアドバイスをくれた。

1年を通して顔を出してくれる人もいる。山住神社の手前、標高1,000メートル以上のところにある「山住の水」が目的だ。岩場から出ているこの水は、道路が整備されていない頃でも、信仰のある人は危険を顧みず、汲みに行っていたそうだ。

水を汲みにくる常連さんは、市内だけでなく御前崎周辺の沿岸部や長野、岐阜など他県の人もいる。「お客さんと話すことが私の仕事。口コミで、また別の人が来てくれる。この水を通して、もっと水窪のことを知ってもらいたいね」煮干しやカツオなど土産を持ってきてくれるんだと話してくれたが、それ以上に水で縁がつながっていくことに喜びを感じているようだ。

こんなこともあった。この水で飲めれば、どんな安いお茶でもおいしいんだと話した相手がお茶屋さんだったという。飲んでもらったら「なるほど、うまい」とびっくり。その言葉がうれしかったやぁ、と頬を緩める杉山さん。お茶のおいしさは水で決まるということが伝わった。

岩から流れ出る水は、1年中、ほとんど水温は変わらない。少し古びていた看板も新しく付け替えたし、と杉山さんは環境にも気を配る。周辺にごみが捨てられないよう、掃除など水源の見回りもしている。取水口も昔は1口しかなかったから、けんかになるので口数を増やしてもらったという。「自然の力を大切にしなければ。これから先、生活していく上で一番大事なものは水だよ」と力説した。

天竜区の水（春野）

神の水



家康も飲んだとされる由緒ある水

天竜区春野町勝坂地区。清流気田川の上流に位置し、紅葉の名所である明神峡の起点付近にあたる。切り立った山々と、長年の流水により荒々しく削られた渓谷は、見事な景観を作り出しており年間を通じてドライブなどで訪れる人が多い。

紅葉シーズンになると明神峡では木々が色づき、渓谷をよりいっそう引き立てる。それを目当てに紅葉狩りに訪れる観光客は多い。また、勝坂集落は400年以上伝承する神楽などがある由緒ある集落で、神楽が奉納される秋祭りには大勢の見物客や地元の人でにぎわう。

「神の水」は集落のほぼ中心にあって年間を通じて枯れることなく湧き出しており、その色は透き通ってとても美しい。触ればとても冷たい。また、その名は、その昔、この土地の地頭であった天野氏を討伐するために、この地を訪れた徳川家康が喉の渴きを潤し、その水にたいそう喜んで次の句を詠んだことに由来する。

「よろこびしよもやつきなん清水の神のちかいに七五三縄の内」

以来、村人たちはこの湧水を「神の水」と称して大切に利用してきたという。神楽舞の奉納される清水神社の脇に湧き出す「神の水」。ぜひ、一度訪れてほしい場所の一つである。



天竜区の水（春野）

新宮池



山頂に湧く神秘的池

天竜区春野町^{いずみだいら}和泉平地区。比較的平坦な場所が多く、日当たりが良い。家の周りには家庭菜園、縁側でひと休み。ゆったりとした時間が流れるのどかな集落だ。

そんな和泉平地区の山頂付近、標高およそ500メートルの場所に満々と水をたたえる新宮池^{しんぐういけ}がある。

1周およそ500メートル。この池は和泉平地区の人々にとって大切な水源地である。人々と密接に関わってきたこの池は、古くから竜や大蛇の伝説や諏訪湖とつながっているなどの伝説が残されている。春には新緑と桜のコントラストが美しく、夏には生き物たちが生き生きと飛び交う。秋には紅葉と共にトンボなどが水面を彩り、冬には雪化粧。水面は半分ほど凍り自然の厳しさを伝えるが、その美しさは際立つ。四季折々まったく違う姿を見せるこの池は、年間を通じて来訪者が多い。

周辺は東海自然歩道として整備され、トイレやベンチ案内板などがあり、週末になると家族連れなどがウォーキングや散策などをする姿が見られる。

毎年7月下旬には、祭典が盛大に行われる。池には舟屋台が浮かべられ水面を練り渡る。夜になると打ち上げ花火や水上花火が行われ水面を彩る。山間地の、しかも山頂に位置する場所で舟屋

台を浮かべ行われる祭典の珍しさに、地元以外からも多くの観光客が訪れる。



すてきな暮らし、
みーつけた。
いっぱい、いっぱい、
みーつけた。



私たちのまちの誇りは、豊かな自然です。
でもね、今日、みんなに本当に伝えたいことは、
この大自然の中に溶け込んだ
いつもの暮らし、の面白さ。

例えば、水とともにある暮らし。

水に恵まれたこのまちの毎日は、
ちょっぴりクールで、かっこいい。
ほっこり、なんだかなつかしい。

「てんりゅう暮らしの見本帖」

私たちのこと、知ってほしくてつくりました。
自分たちのまちの暮らしを自慢できるって、
ちょっと素敵でしょ。

■問い合わせ 浜松市天竜区役所区振興課 (☎ 053-922-0011 FAX053-922-0049)
〒 431-3392 浜松市天竜区二俣町二俣 481 番地
E-mail / tn-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp
天竜区の情報 <http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/ward/tenryuku/index.html>

